
さよならの言葉

密 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならの言葉

【Nコード】

N9082C

【作者名】

密 麻容

【あらすじ】

『紅に沈んだ言葉』の由宇が高校一年生の時に遭遇した事件。文化祭終了後に廃部が決まっている部活で、由宇は何を知ることになるのか。『さよならの言葉』は終わりではなく、始まりだった。（由宇の完全一人称に変更しました）

1・桜の木の下で

右手に激痛が走った。

重い目をゆっくりと開けた。痛みは断続的に続いている。手の骨にヒビが入っているか、最悪折れているかもしれない。手は後ろに縛られているため、確認はできなかった。仕方なく、壁に凭れたまま溜息を吐いた。

倉庫に閉じ込められて、意識を失って何時間経ったのかわからない。幸い窓があるため、時間の経過はわかった。無くなっていく光が、夜を呼び寄せる。

衰弱した体は、眠りへと誘った。気絶は睡眠にはならない。まだ体は回復を欲していた。

どうしてこうなったのか、と辿れば、行き着く先は入学式だった。あのときから始まっていた不和。

しかし、後悔はしていない。沈んでいく意識の中、それだけは確かだと思えた。

あの、桜の日から始まった。

光だと、思った。

入試のときに偶然見つけた、まだ開花していない裏庭の桜の木が気になって、入学式が終わってすぐに訪れていた。

桜の花弁が吹雪のように舞い散る中庭で、そこにいるのが当然かのように、三人の男女はしっかりとその存在感を見せ付けていた。動かなかった。いや、動けなかった。何がそうさせているのかわからない。ただ、彼らは自分を待っている。

そんな妙な確信があった。

「入学おめでとう」

その中で一際目立つ中央に位置する青年が、薄く笑みを浮かべた。

柔らかいハスキーな声。それを合図に、三人はこちらへと歩み寄った。近付くにつれ、はつきりと容姿が見て取れる。

僕に声を掛けた青年は淡い色の髪で、容姿を見るとハーフに見える。皆が着ている普通の学ランが、違和感なく似合っていた。

その右隣にいる女性は肩で切り揃えた黒い髪をなびかせ、無表情で見ている。美人が凄むと迫力がある。まるで日本人形のような顔は怒っているように見え、慌てて視線を左へと遣った。

もう一人の青年は漆黒の髪に瞳、そしてフレームレスの眼鏡を掛けていた。典型的な優等生、という感じがする。神経質そうに表情は硬い。全員制服に付けている学章は三年生のものだった。

「君の入学を心から歓迎するよ。須賀由宇くん」

「なぜ、僕の名前を？」

問いかけに、中央の青年はにっこりと笑った。

入学早々、なにが起こっているのかわからなかった。中庭には偶然来ただけで、この高校に上級生の知り合いはいない。なぜ名前を知っているのか。なぜこんな美形が揃ってここにいるのか。会ったことなどなかったはずだ。会っていたら忘れない部類の人達だった。首を傾げて青年を見た。情報が足りなさ過ぎる。その仕種に、青年は突然抱きついてきた。

「うわー当たりだよ。絶対この子に間違いない！」

「妙に自信があるんだな。まあ、お前の勘は信じるけど」

突然抱きつかれたことよりも、女性の言葉遣いに驚いた。突然の抱擁は、弟や妙にスキンシップを好む友人で慣れていた。それが見知らぬ他人であっても、些細なことに思える。それよりも、あの黒髪美人が、男言葉で話すなんて思いもしなかった。耳を疑ってみてもあの声の高さは女性特有のもので、人それぞれということかもしれない、と思い直した。

そして、次の疑問に気付いた。『由宇に間違いない』とは、どういうことなのか。探していたものが見つかった、とでもいうような感じのそれは、喜び以外の何も表してはいなかった。

「先輩方は、僕を待っていたと思っていいんですね？」

「そう！ やっぱり俺の勘は当たっていたね、学人^{がくと}」

「そうだな。透^{とお}の言葉遣いに何も言わないし、聖^{ひじり}の奇行にも対処しているし。須賀、突然のことで理解できないかもしれないが、初めから説明する」

一番まともだと思った学人と呼ばれた眼鏡の青年は、聖と呼んだ青年を引き剥がしてくれた。不満なのか、聖さんは顔を顰めたまま手を離れた。

その様子に、黒髪美人、透さんは呆れたように苦笑した。その微かな笑みが、この三人の関係を表しているようで微笑ましかった。友人というより、親友だと断言できる関係なのは間違いない。今は、その三人が何の用なのかが必要だった。

「俺は三年一組の一宮学人^{いちのみや}。隣のぶつきらばうに話す女が戌亥透^{いぬい}で、突然抱きついたのが伊集院聖^{いじゅういん}。二人とも同じクラスだ。俺たちは三人で『環境整備部』という部を作って活動している。今回は、君を部員に勧誘したくて待っていたということだ」

すらすらと学人さんは説明したが、それを一回聞いただけで理解できるほど内容は簡単ではなかった。

まず、情報を整理しよう。三人の名前、学年、組はわかった。そして、僕を待っていた目的も。その三人が所属している部活は三人で作った環境整備部。

中学校では、部活は最低五人部員が必要だった。

「環境整備部って部員は三人なんですか？ 三人で部活が作れるのですか？ 他にも部員が？」

「環境整備部、通称『万屋』。普通は三人じゃ部活は作れないけど、例外でな。私たちが卒業したら、廃部という条件で成立している。あと、他に部員はいない。ちなみに顧問は英語の教師だ」

透さんが淡々と語ったのに対し、納得して頷いた。例外、と言われればそれで説明になっている。

そして、一度聞いてしまったら、透さんの言葉遣いに違和感はない

かった。自分のことは『私』と言っている辺り、言葉遣いは一種の個性だと感じられる。特に偏見はなかった。

透さんの発言によって、また疑問が増えた。通称、万屋。『万』というのであるから、部の活動はなんでもするということが予想できる。

「その部に、なぜ僕を誘うのですか？」

「部長である聖が選んだからだ。聖の勘は当たるからな。君が必要だということだ」

勘を頼りにするなんて、そんな非科学的なことを信じるような人に学人さんは見えなかった。しかし、透さんも同様に聖さんを信じている。以前に実績があるのかもしれない。

その聖さんが僕を選んだ。それだけが、絶対のようだった。

「それで、僕は何をすればいいんですか？」

「由宇は由宇であればいいんだよ。部を手伝ってもらうかも知れないけど、無理はしなくていいから」

にこにこと、聖さんは答えた。由宇、と名前で呼ばれたことに不快感はない。いつもは馴れ馴れしい態度は警戒に値するが、不思議とこの人は大丈夫だと思えた。

無条件に受け入れるという姿勢に惹かれたのかもしれない。自分に理由を付けた。

「じゃあ、また明日。部室は特別棟の三階、物理準備室の隣だからね」

聖さんはバイバイ、と手を振って校門へ向かって行った。意外と別れはあっさりとしている。その後二人は続いた。

三人は、桜に紛れて消えたように見えた。夢でも見ていたような感覚がする。それでも、桜は現実しか見せなかった。淡い匂いが、先程の出来事を頭に刻み込ませた。

2・物理準備室の隣で

入学式の翌日、実力テストが実施された。さすが進学校というベキか、入学手続きのときに配布された、まだ習っていない高校一年の問題が出ていた。科目は国語、数学、英語の三教科だけだということだけが救いだった。

授業は午前だけの日で、上級生が鞆を持って校舎を出て行く姿が窓から見えた。そのまま家に帰る人もいれば、部活がある人もいる。ちょうど新入生は部活見学をするのに良い機会でもあり、クラスメイトはホームルームが終わってすぐに仲良くなった者同士で話し合っていた。

入学早々友人を作るつもりもなく、さっさと帰る用意をして教室を出た。出席番号が近いからといって友達になる必要はない。友人の選別を見誤ったら、傷付くのは自分だと、身をもって知っていた。今のところ、話の流れで部員になったと思われる部活がある。とりあえず部室に向かうことにした。

特別棟は専門科目の教室がある四階の棟だった。一階は書道部で、残りの教室は倉庫になっている。運動場に近いため、備品が運びやすいという理由からだった。二階は美術部で、石膏や用具で場所をとるため、フロア全部を使っている。三階は理科室全般で、生物、物理、化学と分かれている。四階は音楽室で、その隣に図書室がある。

目的の物理準備室はすぐに見つかった。階段を上がって曲がるとプレートが目に入った。その隣、プレートの無い部屋の前で足を止めた。

中から声が聞こえる。ノックをすると「どうぞ」という返事があり、ゆっくりドアを開けた。

「失礼します」

「うわっ由宇だ。本当に来てくれたんだー」

「…来ない方が良かったですか？」

「いや、来てくれて嬉しいよ！ いや、いきなりあんなこと言われて警戒されたかなーと思ったからさ」

あはは、と笑う聖さんにつられて笑みを浮かべた。自覚はあったみたいだった。初対面で抱きつくし、部に勧誘するし、名前で呼ぶし。今考えると、それで不快に思わない自分もどうか、と思った。こんなに順応性はなかったはずだ。

はつきりいうと、協調性がない。それなのに。

「わかつているなら、少しは遠慮しろ。由宇、ドアを閉めてこっちへ来いよ」

透さんはぶつきらばうに手招きした。それに素直に従い、ドアをきっちり閉めて透さんの勧める椅子へと向かった。

適度な距離を空けて、理科室特有の背凭れのない椅子に行儀良く座った。

「環境整備部へようこそ。まず初めに、由宇は聖の親戚ということにしておくからな。母方の親戚だとも言うっておけばいい」

学人さんはさりと云ったが、聞き流せるものではなかった。皆が名前で呼んでいるのも気になったが、そんなことどうでもいい。なぜ聖さんの親戚だという嘘を吐くのか。その理由の方が大事だった。

「親戚って…」

「君に迷惑をかけないためだ。聖の過度のスキンシップを誤魔化すための手段だと思ってくれていい。聖はこの顔で人気があるからな。突然、聖が新入生に親しくしていれば嫌がらせをしようとする奴が出てきてもおかしくない。だから、聖のことは先輩と呼ばないように。俺たちも名前で呼んだ方がいいな」

3・通称『万屋』で

人気がある人の隣に並ぶのは、同等の人でなければならない。自分の顔は平凡で、聖さん達の中にと明らかに浮くことは知っていた。素晴らしい特技があるわけでもなく、同等と言えるはずがない。それは今までの体験でわかっていることだった。そして、中学の時の友人曰く、『比較的容姿の整った人に好かれる性質』らしいということも理解している。今回も例外なく、そのパターンだった。ちなみに、その中学時代の友人もカッコイイ部類に入り、今は芸能人として活動している。自分のどこが良いのかわからないが、今までもそうだったのだから今更気になることはない、と決心した。嫌がらせには慣れていたが、無いに越したことはない。

その提案を受け入れた。

「わかりました」

「じゃあ、部活の説明をするな。通称『万屋』、ということを決めたことをしているわけじゃない。私は運動神経がいいということから、運動部の助っ人をしている。学人は学習面でのサポートだ。聖はそれ以外、というところかな」

透さん、もとい透先輩は簡潔に淡々と言った。確かに『環境整備』だというのはピッタリだった。この学校は、文化部や一部の運動部は部員が少ない。大会の時に手助けするのは『環境』の『整備』に他ならない。

決まっていることをするわけじゃないなら、何をすればいいのか。無言で学人先輩を見た。

「まだ由宇のことを知らないから、当分の間仕事は回さない。当初の目的として、二ヶ月後にある文化祭の出し物を考えてくれ」

「ちなみに、去年は喫茶店をやったんだよ。紅茶専門で。写真があっただけだよ」

聖さんがきよろきよと探している間に学人先輩はすぐに引き出

しから写真を取り出し、差し出した。

そこにはウエーターとウエートレスに扮した三人が写っていた。真ん中で聖さんは腰に手を当ててモデルのように立って、左には学人先輩が姿勢良く立っていた。容姿が良いため、何を着ても似合っている。

一番意外なのは、透先輩がミニスカートだということだった。すらりと長い足を惜しげもなく晒し、ヒールの高いパンプスを履きこなしていた。長い髪は二つに分けて耳の横で纏められている。

この写真一枚を、何人が欲しがらるだろうか。

「あー透を見てるね？ このときは言葉も敬語だったから、ちゃんと女の子してたんだよ」

4・文化祭について

「女の子してるって何だよ。いつもは違うみたいじゃないか。…由宇、何考えてるんだ？」

透先輩はじつとこちらを見ていた。聖さんが言った通り、失礼なことを考えているとも思ったのか、疑いの眼差しを向けている。嘘を吐いても仕方ない。素直に思ったことを口に出した。

「この格好、可愛いですね。いつもは綺麗だと思いますけど、こういう服だと違って見えます。今回も着るんですか？」

じつと目を見て言うのと、透先輩は思いつきり目を逸らした。ごくあからさまだった。

嫌われたのだろうか。突然のことで訳がわからない。旧知の仲だと思われる聖さんを見ると、透先輩に何か囁いているようだった。声を掛け難かったので学人先輩の方へ向くと、苦笑してこっちを見ていた。

「今回は違うことをする。前と同じことをやっても皆飽きるだろうしな。ちなみに、文化祭は皆必死だから覚悟しておくように」

苦笑を含み笑いに変えた学人先輩に、緊張した。

文化祭で必死とはどういうことなのか。体育祭ならまだしも、文化祭で覚悟するようなことが起こるって。学人先輩が言うのと嘘に聞こえない。嘘じゃないのはわかってるけど。

そんな文化祭の出し物を考えるなんて、荷が重過ぎる。

「何故必死なんですか？ 僕には何をすればいいか検討もつきません」

「そんなに考え込む必要はないよ？ 皆が必死な理由は、賞品が良からなんだ。前は商品券三万円だったかな。僕たちが優勝して、食事に行ったよ」

聖さんはあはは、と軽快に笑った。今日は驚いてばかりだった。高校の行事で三万円の賞金が出るなんて。皆が必死になるのは当

たり前だ。去年この部が優勝したのは納得できた。あの喫茶店なら客は引つ切り無しに来ただろう。今回はそれをしないということは、もう大体のことは決まっているのかもしれない。

新入部員が一から考えるなんてこと、あるはずがないか。

「学人先輩は、もう大体やることを決めているのですか？」

「いや、全く。言ったとおり、由宇に任せろ。何をするか書いて提出するのは四月末日だ。喫茶店など、食品を扱うものは審査が必要だからもっと前に申し出が必要だけど、今回は食品関係のものはしない。もちろん、俺たちも考えるから、気楽に考えればいいさ」

学人先輩は申し込み用紙をヒラヒラと振った。聖さんと透先輩を見ると、二人は笑みを浮かべていた。

最後に保険があれば安心できた。思い付かなければ、三人が何とかしてくれる。それが出来る人たちだということは、少し話したただけでもわかっていた。

容姿では自分は戦力にならない。何かすごいことができるわけではない。そんな自分がこの部のためにできることを探すのは時間がかかりそうだとまた少し落ち込んだ。

長い説明が終わってほっとしたところに、低い音が響いた。空腹の時に鳴る音だと気付くのに時間はかからなかった。発した人物が恥ずかしそうに腹部を押さえていた。

透先輩は困ったように学人先輩と聖さんを見た。

「まだお昼食べてなかったからな。そろそろ帰るか」

「そうだね。透もお腹が減ったみたいだし」

聖さんの一声で学人先輩と透先輩は帰る準備を始めた。さすが部長というところだ。

時計を見ると一時を示している。授業が終わったのは十二時過ぎだから、一時間ほど話していたことになる。自分も少しの空腹を感じていることに気付いた。

そういえば、と鞆の中を探って目的の物を取り出した。昨日作りすぎて余ったものだ。

「透先輩、帰るまでのおやつといつとで、」
「どうですか？」

5・部活初日に

「なんだ？　…胡麻団子か」

透先輩はタツパを開けて中を確認した。

少しお腹が減るかもしれないと思って持ってきていたものだった。今は別に訴えるほど空腹を感じているわけでもない。それなら、必要な人にあげればいい。珍しく自信作だった。

「僕の手作りですけど、良ければどうぞ」

「いただきます」

迷うことなく透先輩は一つ取って口に運んだ。

もぐもぐと咀嚼している間が緊張した。感想はどうだろうか。自信作だけど、透先輩の味覚には合うかわからない。

全てを飲み込む音が聞こえた。

「…美味しい。全部貰っていい？」

「どうぞ。ちょうど処分に困っていましたので」

嬉しさを隠しきれずにはにcanだ。透先輩もにっこりと返した。大量に作りすぎて、昨日の夜と今日の朝に食べても余っていたものだった。はつきり言って、もう食べる気にはなれない。

タツパを透先輩に渡して帰る準備をしていると、用意が終わった聖さんと目が合った。視線を逸らし、羨ましそうに透先輩を見た。透先輩が美味しいと言ったのが気になっているように見えた。

どうしようかと透先輩を見ると、苦笑して聖さんにタツパを差し出した。途端に聖さんは笑顔になり、胡麻団子の一つ取って食べた。素直な人だと思う。整った西洋的な容姿にこの性格だと、人を惹き付けるに違いない。

「うわー美味しい。これなら売れるのに。ホラ、学人も」

ホラホラ、と聖さんに急かされながら、学人先輩も手に取って食べた。

「…確かに。でも、これは駄目だな」

学人先輩の答えに、聖さんはそくだよねーと残念そうに返し、透先輩は無言で二個目を口に入れた。

文化祭には使えない。食品関係は届けを出せば大丈夫だったと言っていた、その矛盾は何なのか。

疑問が顔に表れていたらしく、学人先輩は溜息を吐いて言った。

「手作りのものは禁止なんだ。既製品なら制限があるけど許可される。料理部なんかは、かなり不利になるな。去年俺たちがやった喫茶店は紅茶専門だから出来たんだ。使用するのは水と茶葉だけだからな。後は市販のクッキーを用意した」

そう言って学人先輩はもう一つ口に入れた。

顔が緩んでくるのを感じた。二個目を食べるということは、気に入ってくれている証拠だ。

学人先輩の説明に納得した。食中毒問題が絡んでいるわけだ。六月の気候といえば不安定で、湿気が多い季節でもある。そんな時期に食品を扱うには厳重な警戒が必要になるだろう。手作りのものなんて、禁止になって当たり前だ。現に、今の季節だから団子を持ってくることができる。まあ、夏は夏用のお菓子があるけど。

「うーん残念。また、人を集めて、人が影響されるものを考えないとね。さ、帰ろうか」

聖さんの合図で、透先輩と学人先輩は先に部屋を出た。聖さんは鍵についた輪に指を入れてくるくる回している。鍵を閉めるのは聖さんだ。

学人先輩と透先輩を待たせるわけにもいかないので、急いで廊下に出た。特別棟なのに、多くの人の気配がした。文化祭に力を入れているということが実感できる。文化部は一層力が入るのだろう。

帰り道、他愛もない話が続いた。三人は中学からの知り合いだから、透先輩の言葉遣いは三人の兄の影響など。思ったとおり、聖さんは日本人とイギリス人のハーフだった。綺麗な栗色のふわふわした少し癖のある髪は地毛で、容姿も目を引くが髪が一番気になっていた。ただの黒い髪とは全然違う。透先輩も学人先輩も黒髪だけど、

質が違っているように見える。烏の濡れ羽色、漆黒と喻えられるが、僕はただの黒だ。

劣等感はあるけど、すごく今更な感じがして気にはならなかった。透先輩よりも背が低いことも、要素の一つにすぎない。当然のように聖さんも学人先輩も透先輩より背が高い。もう、無いもの強請りはしないことにしていた。

電車通学の三人と別れ、駅を少し過ぎた家へ向かった。別れ際に、聖さんが名残惜しそうに抱きついてきた感触がまだ残っている。学人先輩が言っていたように、スキンシップが好きなのだろうか。今まで他人との接触が少なかったため、まだ慣れそうになかった。

6・休日明けの月曜日に

土曜日曜はいつも通りの休日で終わった。特に出掛けることもなく、珍しく家にいた弟のために食事や菓子を作ったりしたただだった。その間、文化祭のことについて考えてみたが、良い案は思い付かなかった。

そんな休日明けの月曜、校門を少し過ぎたところにある掲示板に人が集まっていた。その掲示板は部活動の連絡として使う、と入学式に説明があった。つまりは部の勧誘や、文化祭の前には宣伝に使われるということだ。

別に野次馬をしようとは思わず、通り過ぎようとした。しかし、誰かに押されたのか、突然前に飛び出してきた人にぶつかった。とりあえず謝って早くこの場を去ろうとしたそのとき、腕を掴まれた。「お前、須賀由宇じゃないか？」

知らない男子生徒が凝視して、思わず身構えた。すかさず学章とネームプレートに視線を向けた。二年、野村。

なぜ僕の名前を知っているのだろう。入学して登校したのはこれで三回目だ。クラスメイトでも覚えていないだろう。

しかし、その声に反応して、掲示板を見ていた生徒の目が一斉にこっちへ向いた。これだけ反応されると、怖い。押されるようにして掲示板の前に来たとき、啞然とすると同時に納得できた。

「『万屋に新入部員。その正体は王子こと伊集院聖の親戚！』……」

そんな大きな見出しで始まっているものは、新聞部発行の号外新聞だった。記事として、僕が新入部員だということ、聖さんの母方の親戚ということ、新入生のための万屋の説明などがあった。あの三人の集まりだから、生徒の関心を惹くのは当たり前だ。記事になりやすいのだろう。

でも、一つだけわからないことがあった。なぜ聖は『王子』と呼ばれているのか。

「学人先輩、『王子』ってなんですか？」

「…聖が『王子』と呼ばれているのは、『天使の輪』、髪が光つてできる輪が王冠のように見えるからだ」

少し前から背後に学人先輩が立っていたのには気付いていた。不意打ちのように声をかけたが、学人先輩は何でもないかのようにすぐに返した。さすがだ。動揺することなんてあるのか疑いたくなる。学人先輩がいることから、聖さんと透先輩も近くにいるのかと思い、辺りを見回した。

「透はバスケット部の朝練だ。聖はもうすぐ来るだろう」

「…学人先輩、さらりと先を読みますよね」

「辺りを見回していたら、察しはつくだろう。君は聡明だが、根は素直だ」

照れた顔を隠すため、学人先輩から顔を背けた。

何を根拠に言っているのかわからないけど、当たっているから何も言えない。聡明かどうかは自分で評価はできないけど、学力は良い方だ。実際、入学試験では上位五位に入っている。根は素直、というか単純だと言われたことがある。もっと要領よくすればいいのに、とも。

学人先輩と話していたら、周りの生徒はこそこそと囁き始めた。微かに聞こえる内容でわかるのは、一宮先輩カッコイイや、王子様は何処にいるのかなど、三人に関係することばかりだった。

近くで見ると学人先輩の眼鏡には度が入ってないように見える。顔の輪郭にレンズ部分の差がなかった。眼鏡を外すともっとカッコよく見えるに違いない。

「先輩、伊達眼鏡ですか？」

「いや、少し度は入っている。まあ、一番後ろの席だと黒板が見えにくい程度の視力だけだな」

「役割ですね。聖さんをバックアップする位置にいるから、顔を前面に出さない。…あれ、違っていましたか？」

学人先輩は無言でじろじろと僕の顔を見ていた。観察されている

ような感じだった。

必要不可欠ではない眼鏡をかけているという理由はそれしか見付からなかった。それが間違いだとしたら、自分の考えは浅はかしか言えない。

「間違つてはいないが、昨日の今日でよくそれがわかったな」

感心するように口の端を上げて言つた学人先輩に笑い返した。

褒められるのは嬉しい。それが生徒から特別扱いされている人からだから。いや、この場合は部活の先輩だからだろう。人の物差しで計つたりはしない。

その『人の物差し』、生徒のざわつきは大きくなる一方だった。

「先輩方、人気あるんですね」

「当然だ。万屋だからな。君もその一員なんだ。今日も部室へ来るように」

「はい。そういえば、活動日はいつ…」

「新聞部の佐川です。新入部員がいるというのは本当だったんですね！ 詳しく聞かせてください」

由宇の質問を遮つて、二年生の学章を付けた男子生徒が間に入ってきた。腕には『新聞部』と書かれた腕章を付けている。

突然現れた生徒に学人先輩は一瞬嫌な顔をしたが、すぐに薄い笑みに変えた。佐川は気付いていないようだった。

「由宇、活動日は一応月曜から金曜だ。基本は自由活動だから、必ず来る必要はない。新聞部の方、まだ詳しいことを話せる段階ではないので、後日時間をとつてお話します」

につこりと知的な笑みを向けられ、佐川は即答で承諾した。まあ、追求しても言葉で丸め込まれるのは予想できる。

「じゃあ、行こうか。聖に見つかからない内に」

フフフと笑つた学人先輩に背中を押され、校舎へと向かった。いろいろと流されてばかりだった。今更、いつから部員になったのかなんて聞けない。いつのまにかそういうことになっていたけど、断るつもりはなかった。他の部に勧誘されることがなくなるし、悪く

はない。

そのとき、好奇の視線の中に憎悪を含んだ視線が混じっていることに気付かなかった。

7・部活が日課になって

部室のドアを開けると、すでに三人は来ていた。開けたのが僕だとわかれると、途端に聖さんは笑顔を浮かべた。花が咲くような、と喻えられるその笑顔は皆が言っていたとおり『王子』だった。

「じゃあ、聖も透も仕事に行ってこい」

「えー由宇が来たばかりじゃん。まだ時間あるって」

「その由宇を助きたいなら、自分の仕事を早く終わらせて文化祭のことを手伝うんだな」

学人先輩の返答に言葉を詰まらせた聖さんは、渋々といった様子で部屋を出ていった。透先輩は呆れたように溜息を吐いて後に続いた。

ドアが閉まると、そこは別世界のように感じられた。学人先輩と二人きりというのは緊張する。掲示板の前では普通に話していたが、周りに誰もいない状況は初めてだ。聖さんや透先輩と二人きりでも同じことだと思う。

どうしようかとドアの前に立っていると、学人先輩は怪訝な視線を向けた。

「座らないのか？」

「えっと……どこに座ればいいでしょうか」

「どこでもいい。一応、聖と透がよく座る椅子はこれだけど。あまり俺たちに遠慮しなくていいからな」

学人先輩は視線を机の書類に落とした。学人先輩が指した椅子以外、残った二脚の椅子を見た。

そう言われても、先輩なのだから遠慮はしてしまう。先輩に対する礼儀は守って、緊張しない程度に接すればいいのかもしれない。

とりあえず、失礼にならないように一つ椅子を空けて座った。

「いい距離感だな。さて、君のことを教えてもらおうと思っていたが、俺たちも言っていないことが多いからな。追々知っていけばいい」

部室は毎日空けているから。来なくてもいいけど、来てくれると聖が喜ぶから、なるべく来てほしい。あと、当分仕事は回さないから、ここで何をしていてもかまわない。宿題するのもいいな。わからないところがあったら、教えるが？」

「有難う御座います。特に用事がない限り、ここに来ます。…本当に僕が部員でいいんですか？」

ずっと思おうと思っていた疑問に、学人先輩は眉を顰めた。

嫌な質問なのはわかっていいる。でも、はつきりさせたかった。聖さんが自分を気に入ってくれているのはわかるけど、一人だけの部ではない。学人先輩や透先輩は不本意なのかもしれない。

朝のことであつたが、この部は特別だ。選ばれた人しか入れない。というよりも、創設して以来新入部員はない。そんな中、僕は聖さんの親戚だと偽つてでも部員になつていいる。

「聖が誘つたんだ。気にすることはない。君こそ、勝手に部員にされて嫌じゃないのか？」

「僕は他の部活に誘われなくなるので助かります。…わかりました。この部で僕にもできることを探します。今は文化祭のことですね」

逸らされない学人先輩の視線を受け止めた。

もう迷うのは止めた。必要だと言われて拒絶する理由は見当たらない。それならば、この部で自分の居場所を見つけなければいい。

六月の文化祭後に廃部が決まつていいる部だけだ。

「…そんな由宇だから、聖が選んだんだろうな」

学人先輩の呟きに首を傾げた。学人先輩は何でもない、とでもいうようにそ知らぬ顔をして、視線を机の上にある書類に戻した。

沈黙が覆う。しかし、それは不快ではなかつた。入学して一週間も経っていないのに早速出た宿題に取り掛かり、時間は過ぎていった。宿題はすぐに終わり、部の課題の文化祭について考えた。部に関係ないものでもいいことは要項を見て知つていいる。文化的なもの。人目を惹くもの。聖さんが出れば、人目はすぐに集まるだろうけど、外から運動部の掛け声が聞こえた。吹奏楽部の音も混じつていいる。

聖さんと透先輩が戻ってくるまで、穏やかな時間は続いた。
帰りは一緒に駅まで行くのが、日課になった。

8・クラスの中で

「須賀くん、あの万屋の部員なんだってね！」

「王子様の親戚って本当？」

数日後、登校早々にクラスメイトの女子生徒から質問にあった。確か、妹尾と栗田という名前だったはずで、ネームプレートを見ると合っていた。新聞部の号外を見て、声を掛けてきたのはわかる。もう聖さんを『王子様』と呼んでいた。号外が貼り出されてから数日経っているのは、僕に声を掛け辛かったからだろう。

二人はただのクラスメイトのはずだった。それなのに、聖さんたちのことが聞きたくて僕に声を掛ける。こういうのは嫌だった。部員になって間もない自分に聞くより、他の人に聞いた方が確実なのに。こういう場合、答えても答えなくても結論は同じだ。

彼女たちは、僕が特別扱いされていることが気にいらないだけだ。「確かに環境整備部に入ったよ。そして聖さんの親戚だ。先輩たちのことが聞きたいなら、他の人に聞いた方がいい。僕はまだ知らないことが多いからね」

淡々と返すと、妹尾は見るからに不機嫌になり、「そうねっ」と荒々しく去っていった。

何を期待しているのか。まだクラスで友達を作っていないことを考えれば、人との接触を避けていることもわかるだろうに。

僕の対応を見て、周りにいた生徒はコソコソと何か言い合っていた。内容が良いものではないことくらい、表情でわかる。もう、このクラスで友達は作れそうにない。

作りたくなかった。

「大丈夫ですか？」

呆れている中、声を掛けてきたのは真弓夏目だった。変わった名前なので覚えていた。名字と名前が入れ替わっているような感じがする。

真弓が興味本位で声を掛けたのではないことが、表情から窺えた。
「部活のこと？ それとも先輩のこと？」

「須賀くんのことです。入学してから騒々しいことに巻き込まれているので。顔色が良くないときもありますよね。今だって」

真弓の洞察力に驚いた。ただの八方美人のように見えていたが、それは本意だったということだ。妹尾のように聖さんの情報目当てで近寄ってきたわけではない。

意識せずに笑えた。

「これは体質なんだよ。多分、真弓くんの敬語と同じだと思うけど」
「…そうですか。では、須賀くんに迷惑が掛からないためにも、行きますね」

頷いて了承を示すと、真弓は笑顔で席へ戻った。気配りは完璧だった。

真弓の敬語は、明らかに人との接触に慣れていないことを表していた。八方美人に見えるのもそのためだ。人との距離がわからないから、誰でも同じように接する。それは、自分が人の悪意を受け取ってしまう体質に似ていた。自分に向かったの怒鳴り声でなくても、ストレスになっていく。それは厄介だったが、何年も前から付き合っている。

素っ気無い態度が原因になったのか、僕に声を掛けてくる者はいなくなつた。真弓も遠慮して離れている。そして、昼食はいつの間にか部室で食べるようになっていた。僕が一人で食べているのを知った聖さんが、部室で食べようと誘ったのが始まりだった。そこには当然のように透先輩と学人先輩もいた。三人は同じクラスなのだから教室で食べればいいのに、と思ったが、これは自分のためだとわかっている。

その優しさに甘えることにした。

9・生徒会長と新聞部部長が来て

部室に向かう渡り廊下で、前に立ちはだかったのは一見して不良に分類される男子生徒だった。ネームプレートは付けていないが、肌蹴た学ランの襟下に「矢野」という刺繍が見える。学章から二年生だということがわかった。

「王子の親戚だからって、図に乗るな。お前があ部の部にいることで価値が下がる。戌亥サンも一宮サンも、良いように思っていないに決まってる」

断言したその言葉は、いつも思っていたことだ。そして、それは聖さんが居て良いと言った一つの許可で正当化されていた。周りから見たら、邪魔者でしかない。そんな自分の存在は、聖さんの親戚という嘘で成り立っていることは重々承知の上だった。

「早く辞めるんだな！」

去り際、矢野は脛を蹴った。顔を殴ると痕が残るから、服で隠れる場所を攻撃したのだろう。矢野の苛立ちを表すかのような強い蹴りに膝をついた。

下から見上げた矢野の後姿に吐き気がした。これだから、人の悪意は嫌なんだ。

鈍く痛む足を動かし、部室に着いた。いつものようにノックして入ると、見たことのある人が聖さんと話していた。振り向いた女性の顔を見ると、それは入学式の際に見た生徒会長、緑川裕紀だった。凜とした雰囲気と、男性のような名前が印象的だったのを覚えている。そういえば透先輩もそうか、と思ったが、透先輩とは違うカッコよさの女性だった。

空気が違っているような気がした。透先輩は目を向けようとはしないし、学人先輩は一応普段通りだけど、気を張っているような感

じだった。聖さんは変わらないようだが、表情は仮面のように見えた。

「君が須賀くんね。初めまして」

「初めまして、須賀由宇です」

自然の動作で右手を差し出してきた会長に、迷うことなく握手を返した。変に遠慮するのは失礼だ。三人の美形に囲まれている部なのだから、会長の容姿は特別綺麗だとは思えなかった。

慣れというか順応というか。比較的容姿の整った人に好かれる、という特性はここでも発揮された。

「伊集院くんの言ってたとおりね。顔とか、肩書きとか気にしないのね」

握手はすぐに終わった。しかし、会長の視線は離れなかった。にこにこと、楽しそうに笑っている。

顔とか肩書きを気にしないなんていつものことだった。礼儀は弁えているので、相手が不快には思わないようにはしている。変に緊張したり、遠慮しただけだった。

聖さんと話していたのだから、聖さんに用があるはずだ。窺うように聖さんを見た。

「会長、話はあれで終わりだよ」

「ええ、よろしく願いますわ。須賀くんも、お願いね」

につこりと笑って会長は部室を出て行った。部室にはいつものように四人が残った。

話が見えてこないの、とりあえずいつもの席に座った。

「簡単に言うとな、文化祭で頑張ってたことだよ。それが会長の依頼」

「会長が直々に？」

「うん。僕たちが二年連続優勝したから余計にね」

聖さんは何でもないかのように言ったが、責任重大だと思えた。それも今回の出し物を考えるのは自分。

頭が痛くなってきた。忘れていた膝もズキズキと痛む。

「由宇、そんなに気にすることもないよ？ あの人はある人ではないよ？ 企んでいると思うし。まあ、期待しているのは芸術度だから、優勝を狙うとかは考えなくてもいいよ」

会長が期待しているのは芸術度、と聞いて少し気が楽になった。

芸術面は聖さんが前面に出るだけで充たされる。締め切りまでまだ二週間ある。

ここにきて、やっと安心できた。どこから気を張っていたのかわからないほど、警戒していたようだ。

ノックの音が聞こえた。聖さんが入室許可の返事をする。会長が言い忘れたことでもあったのかな。

「会長が来てみたいだね」

現れたのは知らない人だった。学章は三年生のもので、右腕には『新聞部』という腕章が付けられている。

「初めまして、須賀くん。新聞部部長、片岸^{かたぎし}だ。この前は佐川が悪かったね」

「いえ…」

「片岸部長は何が知りたくて来たのかな？」

片岸部長と僕の間には聖さんが割り込んだ。自然な感じだったけど、守られているように思えた。

「ズバリ、文化祭の出し物についてだ。会長も来てたことだし、決まったんだね？」

ニヤリと片岸部長は笑った。確信している笑みだ。それはさながら勝者を気取っているようで、気分が悪くなった。気分が悪くなるということは、悪意が含まれている。それを無意識に感じ取っていた。

それに対して、聖さんはあっさりとしていた。

「決まってるじゃないよ。まだ形も掴めていない」

「へえ？ じゃあ、前と同じものでもやる？」

「うーん、どうかな。制服モノはやるかもしれないけど」

曖昧な答えに、片岸部長は聖さんの言葉を信じたようだった。聖

さんが言っていることは全部本当のことだから、勘繰っても無駄だ。でも、ここで変に隠しているように見られて疑われるのは避けたい。「制服もの、ね。確かにどの部でも仮装はするし。まあ、楽しみにしてるよ」

言いたいことだけ言って片岸部長は出て行った。

しんと静まった部室。やっと落ち着いて椅子に座ると、聖さんは腕を天井へと伸ばして唸った。

「ホント、こつちを探るより自分の心配しろって感じだよね。由宇、ゆつくり探そう。その方が楽みたいだし」

「わかりました。聖さん、先程は有難う御座いました。庇ってくださいですね？」

僕の指摘に、聖さんは一瞬動きを止めたが、すぐに笑みに変えた。右手を左肩に置き、左腕をぐるぐると回している。

「まあね。由宇が下級生だからって従う必要はないからね。じゃあ、行ってくるよ。今日はバスケ部だったよね」

聖さんは学人先輩が頷くのを確かめると、意気揚々と部屋を出て行った。透先輩は学人先輩の手元にある予定表を覗き込み、確認して聖さんの後に続いた。

やっといつも通りになった。学人先輩と二人きりの部室はいつの間にか安心できるものになっていた。それは、自分の中で『部員』として自覚ができた証拠だった。

10・文化祭に向けて

「由宇、それを歌ってもらえるか？」

いつものように宿題をしていると、学人先輩が驚いたように言った。

無意識の内に鼻歌を口ずさんでいたようだった。部室で、前より大きく吹奏楽部の演奏が聞こえる。それは文化祭に向けて牽制するためだと学人先輩は言っていた。吹奏楽部は音楽が専門なのだから、他の部や組は音楽系統のものはやるな、ということだ。確かに、音楽で本格的な吹奏楽部に勝てる部はないだろう。

音が自然と耳に入るから、勝手に口が動いていた。

「今聞こえている曲を、ですか？」

「ああ、今すぐに」

今聞こえているのは、最近人気のある曲だった。弟が流行りの曲を入れたMDをくれるから、部屋にいるときはいつも聴いている。その一つにこの曲があった。

この曲は男性二人で歌っているから、一人だと味気ない。でも、学人先輩は待っていた。

決心して、腰を上げた。そのまま後ろに下がって学人先輩から距離をあける。

「じゃあ、サビに入るところから……」

吹奏楽部の演奏に合わせて歌い出した。この曲は得意な音が多く入っていて歌いやすい。ちなみに、声の伸びがいいのはソからシまでの間だった。

音響設備が整っていない部屋だから、声は響かなかった。でも、学人先輩との距離なら問題はない。久しぶりに歌ったので、所々は声が擦れた。

不満が残る出来だったけど、一応歌い終えた。

吹奏楽部の演奏も終わった。

「学人先輩？」

「…歌だな。合唱部があるから、バンドにすればいいか」

一人でブツブツを呟いている学人先輩に、それ以上声を掛けられなかった。自分の歌に何かあったのだろうか。歌は趣味とストレス発散を兼ねて週に一度は歌っている。

評価を待つかのように、何故か緊張していた。

「由宇、特技があるじゃないか。今回の文化祭は君の歌でいく」

「僕の歌、ですか…」

歌は別に特技だとは思わなかった。ただ、好きなだけだ。好きこそ物の上手なれ、とでもいうところかな。自分の声なんてわからないのだから、上手いかどうか知る由もない。

学人先輩は決定事項のように、文化祭の提出用紙に記入している。

「先輩、聖さんと透先輩に相談しなくていいんですか？」

「文句は言わないさ。特に聖はな。由宇、本気で歌わなかったら？ 声を抑えていたな」

なんで分かるんだろう。確かに声を抑えていた。防音設備もないこの部屋で歌えば、周りの迷惑になる。それに、学人先輩との距離なら、耳が痛くなるだろう。腹筋を使って歌ったけど、力は出し切っていなかった。

「ここでは全力で歌えません。音楽室や体育館や外ならいいですけど」

「ちゃんと腹式でやっているのか。鍛えてるんだな」

「そうです。触ってみます？ 結構筋肉あるんですよ」

見た目はただの細い男子高校生だけど、筋肉はある程度付いている。細く見えるのは、無駄な脂肪がないからだ。そして、筋骨隆々とまでは鍛えていないので、外見だけではひ弱に見えているだろう。学人先輩の前に立った。学人先輩は検分するように腹部に触れた。「着痩せするタイプか。しっかりと鍛えているんだな。声のためか？」

「はい。咽喉で歌うとすぐ疲れますし。本格的にはやっていませんけど、これくらいはしようかと」

「背筋もバランスよく鍛えてあるな…これなら」

「あー学人がセクハラしてる！」

勢いよくドアを開けた聖さんは、突然叫んだ。そしてそのまま動きを止めた。

改めて自分の状況を見ると、学人先輩に抱きつかれているようだった。その上、腰に手が回っている。背筋を触っていたのだから、仕方ないの体勢だ。

聖さんから見れば、学人先輩がセクハラしているようにも見えるか。

「聖、勘違いするな。これは診断みたいなものだと思え。文化祭の主演なんだから」

「…文化祭の主役？ 由宇が何かするの？」

「ああ。歌を歌う」

「うわー凄いな。学人が言うからには本気で勝ちにいくつもりだよ」
聖さんは後ろから抱き付いてきた。所有権を主張するみたいなその行動に、学人先輩はあっさりと手を放した。

背中に温もりを感じる。いつもは前から抱きつかれているから心構えができているけど、この体勢は苦手だ。聖さんの方が背が高いので、息が髪に当たる。

「聖さん…この体勢はちょっと…」

「リハビリだよ。由宇、人を拒絶しすぎ。初めて会ったときに思っただけだね」

凶星だった。裏切られるのが嫌だから、傷付きたくないから、初めから無かったことにしたい。人が嫌いなわけじゃない。人が醜くなるのが嫌だった。

少しの悪意で人は変わる。悪口や陰口はグループに必ずあった。他人を悪く言って仲間だと感じる。自分は悪くないと思えるし、皆と一緒にという一体感がある。それが嫌だった。

そして、自分が傷付いていると思うのが嫌だった。

「こうやって接触していれば、僕は味方だと思ってくれるかなって、人との摩擦は慣れていくしかないんだし」

「それもあるだろうが、聖はただ由宇に抱きつきたいだけなんだろう」

尤もらしいことを言っていた聖さんは、「それもあるけどねー。でも言ったことも本音だよ」と苦笑して返した。

温もりが不快なんじゃない。掴めない距離感が不安だった。先輩たちは良い人だとは思っけど、まだわからなかった。

言いたい言葉を呑み込んだ。それは確認と、希望の言葉で。

あなたを信じてもいいですか？

「学人先輩、具体的にはどういったことをするんですか？」

「由宇がメインで歌を歌う。聖と一緒に歌うかは選曲しだいだな。透はバイオリンが弾けるし、俺はピアノだな」

「へえ、もう決まったのか」

聖さんが開けたままだった入り口から、透先輩は意外そうに言った。聖さんに抱きしめられたままで目が合った。途端に眉を寄せられる。気持ち悪いと思われたのかもしれない。男二人が抱き合っているのだから。

まあ、最初が最初だから、今更って感じだけど。もう三度目だし。

「聖、職権濫用するな。部長だからって、なんでも許されるわけじゃない」

「学人もさつきしてたし、いいじゃん」

「学人も!？」

透先輩の驚きに、学人先輩は溜息を吐いた。つまらないことを言うな、という感じだった。そんな誤解をされるのが不愉快なのだろう。

「俺は腹筋と背筋を確かめるために触っただけだ」

「まあ、そんなことだろうとは思っただけど。文化祭の主役にしようとするくらいだしな」

透先輩は近寄ってきて、聖さんの腕を抓った。服の上からだけど、痛そうだ。聖さんは渋々腕を放した。

背中が寒くなった。ただ、聖さんが離れたただけなのに、無くなったのは温もりだけじゃないような気がする。

「これから頑張ります。文化祭も、人に慣れるのも」

僕の決心に、三人は頷いた。息の合ったその動きに、笑みを浮かべた。心の奥では笑みは引き攣っている。

この三人の中に入ることはできない。先輩のためにも、自分のためにも。

11・倉庫の中で

身体が震えた。五月上旬の夜は、思ったよりも冷え込んでいる。古い倉庫のため、隙間風が遠慮なく入ってきた。否応なく、体温を奪っていく。

重い目を開けても、視界は限られていた。倉庫内は暗く、今は窓から入ってくる月の光だけが頼りだった。時間の感覚はもうない。

「絶対心配してるよね……」

連絡も無しにこの暗い時間に帰らないとなると、さすがに心配するだろう。弟なんて、誘拐を疑うかもしれない。僕に関しては心配性なところがあった。

先輩たちはどうだろう。僕を監禁した人たちは、先輩たちに知らせたのだろうか。知らせたのなら、これは見せしめだ。知らせないのなら、ただの制裁。先輩たちは、今日は無断欠席だと思うだけだ。

どっちでも良かった。気がかりなのは、家族を心配させていることだった。今まで良い子で通してきたから、突然の事態にどう対処しているかが問題だ。警察を呼んでいないことを祈ろう。

右手がジンジンと痛くなってきた。麻痺していた痛覚が戻ってきている。今度は痛みで目が冴えてきた。空腹も眠気を飛ばす。こういった怪我は久しぶりだった。この痛みは知っている。骨が折れている痛みだ。治りが早いといいけど。

片手が使えなくなったから、当分部活動も出来そうにない。幸い、文化祭に影響はなかった。襲った人たちは、僕が何をするのか知らなかったようだ。バンドということで、演奏担当だと思われたのだろう。

右手で良かった。利き手の左手だと、生活に支障が出るから。この状況でも冷静な自分がいた。

12・部室の中で

「ムカツクな、あの二人を見てると」

部室のドアを開けようとした手を止めた。透先輩の不機嫌な声が気になる。『あの二人』とは誰のことなのか。

「浮かれているんだろ。それもわからないではないが」

学人先輩も同意するように答えた。こちらは淡々と述べたという感じだ。その後深い溜息が続いた。

「聖は特別なんだ。それをわかっていない」

「ずっと三人だったからな。こんなことを予想しなかった」

嫌でもわかった。透先輩の『ムカツク二人』は僕と聖さんのことだ。そして、主語を『由宇』にすれば納得できた。透先輩と学人先輩から見た僕だった。浮かれていて、部の価値がわかっていなくて、三人の中に入ってきた。

学人先輩の溜息から、良くは思われてことがわかる。

「由宇、入らないの？」

背後から掛かった声に、体が震えた。盗み聞きをしていたのを見られていたのか。

聖さんは僕が開けられなかったドアを抵抗なく開けた。部室には学人先輩と透先輩がいつもの席に座っている。僕が話を聞いていたことを知っているのに、二人はいつもと変わらなかった。あれは悪口的一种だったはずだ。それを本人が聞いていたことを知っても普通に通にできる。

この部で自分は邪魔者だ。

「由宇、調理室に行くぞ」

「頑張れよ。私も後から行くから」

「透も頑張つて。じゃあ、行こうか」

はい、と明るい返事をしたが、上手く笑えている自信がなかった。いや、きちんと笑顔になっているはずだ。

自分が傷付いていると思うのも嫌だが、傷付いていると知られるのはもっと嫌だから。

13・初めての部活動で

「今日はよろしく、須賀くん」

料理部の部長、久保涼子は笑顔で言った。

今日は初めての出勤だった。和食を得意とする母の代わりに、中華好きの弟のために中華料理を作っていることを知った学人先輩から回された仕事だった。万屋には料理担当がいなくて助かったと言われたとき、嬉しかった。自分でも部のためにできることがある。得意とするのは中華だけど、洋食もできないことはない。ただ、和食は母が専門のため、作ったことがなかった。

「昨日言われたものは用意しておいたわ。じゃあ、早速お願いできるかしら」

「はい」

「じゃあ由宇、また後で。透も連れてくるね。一応デビューということで、学人にいてもらうから。楽しみにしてる」

バイバイ、と聖さんは手を振って調理室を出て行った。その後、後ろで溜息が聞こえた。

料理部の部員のもだった。王子様を近くで見れたことが嬉しかったのだろ。感嘆の溜息だった。何人か、まだうつとりとしている。そんな部員を困ったように苦笑して見ていた久保部長は、向き直った。

「始めましょうか」

「はい。では、手順を説明しますので、聞いてください」

一連の流れを説明すると、皆すぐに作業に取り掛かった。料理部ということもあり、手際がいい。十人という少人数なので、目が行き届いて遣り易かった。特に質問もなく、和やかに調理は進んでいた。このまま手持ち無沙汰なのは時間の無駄のような気がしたので、教室の隅で黙って皆が調理しているのを見ていた学人先輩の方へと近寄った。

「先輩、杏仁豆腐は好きですか？」

「特に好きというわけではないが、嫌いじゃない。作るのか？」

「はい。時間があつたら作ろうと思って材料は用意してもらつてたんです。今の感じだとそこまでは出来ないと思うので、全員分作つておこうと思ひまして。聖さんや透先輩も嫌いじゃないですか？」

学人先輩が頷くのを確かめてから、取り掛かった。作る途中、仕上げ段階で何度か助けを求められたので駆けつけたりドタバタしたが、何とか予定通り仕上がった。

天津飯にエビのチリソース煮、海鮮野菜炒めと水餃子が机に並んだ。十人でこれだけ出来れば上出来だ。

後は聖さんと透先輩を待つだけ、というところで二人は現れた。このタイミングの良さは学人先輩の仕業か。料理は温かい内に食べるのが一番なので、ちょうど良かった。

久保部長の横に聖さんが座り、その隣に透先輩、学人先輩、僕と続いた。そのまま久保部長の「いただきます」の声で食事は始まった。

「うわー美味しいね。これは誰が作ったの？」

聖さんの称賛に、おずおずと一人の部員が手を上げた。その部員に聖さんはにつこりと笑みを浮かべ、美味しい、ともう一度言った。王子様の笑みにすっかり骨抜きだ。その後も聖さんは褒めまくり、部員は聖さん信者のようになっていた。

それが気になったのか、久保部長は誰に言うでもなく呟いた。

「やつぱり味付けが重要ね」

浮かれていた部員はその一言で沈黙した。視線が一斉に僕に向いた。そこに負の感情はない。本当に料理が好きなんだな、と感じた。素直に僕の味付けを認めてくれている。

その視線から逃れなくて、杏仁豆腐を机に運んだ。料理はほとんど無くなっていたので、デザートに入ってもいい頃合だった。

僕がこれを作っていたとは知らなかったようで、学人先輩以外の人は驚いたように見ていた。皆それだけ自分の料理に必死だったと

いうことだ。

「杏仁豆腐です。苦手な方もいらっしやると思いますので、ご自由に取ってください」

まずは代表で久保部長が取り分けた。今回白桃と蜜柑、ナタデココを少しだけ入れた。薄味にしたので、苦手な人でも食べられると思う。

「…これはまた美味しいわね。この独特の匂いが嫌いな人でも大丈夫だと思うわ」

久保部長の言葉が引き金になり、元から食べられる人はさっさと取り分けていった。後から苦手だと思われる人も少量ながら取った。その人も美味しそうに表情が柔らかくなったのを見て、自然と笑みが漏れた。嫌いなものでも工夫次第で食べられることがある。それが出来たようなので、作戦成功といったところだ。

聖さんと透先輩も取り分けて口へ運んだ。

「うーんさすが由宇だね。あれ、学人は食べないの？」

「俺は先に食べたからいい。待っている間にな」

「うわっずるい！ しかも何気に隣に座ってるし。がーくーとー」

悔しそうに言う聖さんに学人先輩は勝ち誇ったように余裕の笑みを浮かべていた。二人に挟まれた透先輩は気にした風もなく黙々と食べていた。部長はくすくすと笑っているだけで、部員たちはここにこと眺めていた。

これが万屋ということか。自然体であるのが当然であるかのような。それが受け入れられるのが。

食事が済んで、後片付けに取り掛かった。ちゃんと先輩たちも手伝っていた。万屋ということで気を遣ってくれたのか、ほとんどを部員たちがやってくれた。

調理器具や食器が仕舞われた後、帰るだけになった。

「須賀くん、今日はありがとう。またお願いできるかしら」

「僕で良ければ喜んで」

久保部長は社交辞令で言ったのかもしれないけど、一応承諾した。

部員の承諾があつて、部長である聖さんが決定する。そのシステムを知っているようで、久保部長は聖さんに笑みを向けた。

「じゃあ、またよろしくね。伊集院くん、また頼むわね」

「了解。僕もまた食べたいしね」

聖さんはどういふつもりで言つたか知らないけど、久保部長は笑みを深くし、部員たちはキャーキャー高い声を出した。嬉しいのはよくわかる。だけど。

聖さんに理想を押し付けているような気がするのは自分だけなのか。

「さて、部室に戻ろうか」

聖さんの一声で透先輩は調理室を出て行つた。その後に学人先輩が続き、僕は聖さんに背を押されて聖さんは最後に出た。

廊下に出る前に部員たちの様子を見ると、近くで見た万屋メンバーに興奮しているようだった。後から実感が湧いたのだらう。掲示板のところでの光景に似ていて、頭がチクツと痛んだ。引き摺られて出てくる記憶は、さっきの透先輩と学人先輩の会話だ。

最後に一瞬だけ見えた久保部長の顔に表情はなかった。何故か目が合った。

14・文化祭の競争で

「やられた……」

部室のドアを開けた透先輩の第一声に、学人先輩が横から中を覗いた。何もコメントはない。

とりあえず廊下に立っただけでも仕方ないので、聖さんは二人の背中を押して中に入った。僕も後に続いた。

言葉が出なかった。部室は見事に荒らされていた。何かを探していたと見える散らかり様に、視線を動かせば目的の物は判明した。

見覚えのある服が無残にも切り裂かれている。それは写真で見た、去年の喫茶店の衣装だった。

「油断した……ここまでするとは思わなかった」

「でも、これでわかったね。僕たちが今回も文化祭で喫茶店をすると思っただけで衣装を駄目にした。それも調理室に行っている間に。学人、幕が開いたね」

学人先輩の失敗した、と苦く言ったのに対し、聖さんは明るく応えた。そして、口の端を上げて学人先輩に向けて強く言い切った。

幕が開いた。何かが始まったことを意味する。この場合、文化祭の競争が始まったということになる。

透先輩は蚊帳の外のように思えたが、しっかり役割はあった。学人先輩が原因を追究する間、聖さんと透先輩は何事もなかったかのように振舞う。それは相手に少なからずダメージを与えることになるだろう。お前なんか怖くない。お前の力なんて及ばない。そう思わせる。

本当に蚊帳の外で何も出来ないのは自分だ。

先輩たちが水面下で動いている中、いつものように部室で宿題をした後に文化祭で歌う曲を選んでいった。高校生が知っているとなる

と、最近の曲になる。早口なものは合わない。音を正確に取る前に進んでしまうから。得意とするのは声が伸びる部分があるものだった。ゆっくり過ぎても息継ぎに困るから、その両方を充たすもので無ければならない。

部室荒らしがあつた日から、動きはなかった。僕が巻き込まれないように、聖さんは仕事を回してこない。学人先輩は部室にいるけど、調査に専念していた。相手の先の情報を得なければ対処できない。

ピリピリとした空気に、この場所から逃げたくなった。しかし、それは出来ない。僕はこの部の一員だ。先輩たちが舞台で頑張っているのに自分だけが観客でいるわけにはいかない。

出来ることをやる。宣言した言葉だけが今は頼りだった。

五月の第一週の月曜日、文化祭の催し物が掲示板に発表された。提出したとおり、『環境整備部』バンド』となっている。その他、合唱部は合唱、料理部は喫茶店、吹奏楽部は体育館で演奏となっている。他の文化部はその部の特性を活かした催し物になっていた。前回のようにならないために、足早に掲示板の前を去った。僕一人だと気付かれにくい。しかし、鋭い視線を感じて振り向くと、僕を睨んでいる二対の瞳に出逢った。そこに表れているのは憎悪。その禍々しい瞳から逃げるように校舎へと向かった。

次の日の放課後に、また料理部で手伝うことになっていた。今回はお菓子を中心に作る予定だ。材料は用意してもらっているので、自分で調合した茶葉を久保部長に渡してから部室に向かった。

調理室と部室がある棟は別で、渡り廊下で繋がっている。渡り廊下に窓は少なく、薄暗い。唯一の蛍光灯も、点滅していて切れかけていた。そのせいか、人通りは全くなかった。

突然、頭を殴られた。蛍光灯に気を取られ、背後の気配に気付かなかった。考える暇はなく、意識は沈んでいく。

意識がなくなる直前、ある匂いを感じた。知っている匂い。花に似た甘い香りに、何故、という疑問だけが残った。

15・文化祭の狂気で

「バンドってことだから、これでいいだろ」

「そうだな。やり過ぎると危険だ」

話し合う声に意識がはつきりした。目を開けると、薄暗い中、二人の男子生徒が立っていた。男だということは、制服と声からわかる。二人は目出し帽を被っていた。

用意周到だ。こんな人気がないところを選び、しっかりと人物が特定できないように目出し帽を被る。格好を気にするならサングラスにマスクぐらいになるだろうが、それでは十分ではない。目出し帽なら髪型はおろか、輪郭さえ掴めなかった。二人の体格は標準で、この学校だけでも何人いるかわからない。

体を動かそうとして、手を後ろに縛られていることに気付いた。もがいてみても、きつく縛られていて緩む気配さえない。ごそごそと動く音に気付いたのか、二人の目は僕に向いた。

唯一見える目は、あの時睨んでいた目と同じように見えた。憎悪の目はどれも同じなのかもしれない。

「気がついたか」

「ここは…」

「使われていない倉庫だ。助けを呼んでも無駄だ」

希望を持たせないように男は言い切った。今更騒ぐ気にはなれなかった。人気がないことはわかっていたし、今は体力を残して置く方が後々役に立つだろう。

大人しくしていると、もう一人が乾いた笑い声を上げた。

「諦めたのか？ 賢明だな。一応この鍵は開けておいてやる。けど、いつ人が来るかわからない。すぐに人が通るかもしれないし、数日経つても来ないかもしれない」

「何故こんなことを…」

「お前が万屋の部員だからだ。ああ、右手は潰しておいた。バンド

は無理だな」

右手を潰した、という言葉境に右手が痛み出した。自覚したら痛くなる。なんて不便な体なんだろう。このまま知らなければ良かったのに。

もう用はない、とばかりに二人は出ていった。しっかりと扉は閉められる。鍵をかける音はしなかったから、言葉通り誰でも開けられるだろう。しかし、誰か来る気配はない。気を長く待つことにした。幸い、身体的な痛みには耐性がある。僕が弱いのは精神的なものだ。

こんな状況になって、なんでこんなことに、と悔やむ気持ちもあるが、部員だからこんな目に遭ったと、嬉しい気持ちもある。僕もバンドの一員だと思われる。一番弱い僕を狙ったのは賢い選択だ。聖さんを傷付けようものなら、他の生徒に袋叩きにされる勢いだろう。

今まで何度か感じたことのある痛みと共に、妙に頭が重かった。何かの薬の影響かもしれない。そうでなければ、右手の痛みで目が覚めていただろう。倦怠感を伴って、また意識は沈んでいく。殴られて気を失っていたのは数分だったようで、窓から日が差し込んでいる。

思い浮かぶのは先輩たちの顔だった。

16・倉庫から出て

今までのことを思い出していると、笑みが漏れた。平凡に過ごすと思っていた高校生活は初日から波乱を含んでいた。中学はそこそこ上手くやっていっていたから、高校はその延長だと思っていた。容姿の整った人から好かれるということはあったけど、ここまでの影響はなかった。どちらかといえば、綺麗な友達から同情されると周りからは思われていたのかもしれない。

今回はそれをも上回る状況だったということだ。

こんな異常な状態で、一つの曲が思い浮かんだ。こんな状況だからこそ思い浮かんだのかもしれない。それは文化祭にピッタリ曲だった。二人で歌っているものだけど、一人で歌っても違和感はない。もし自分が聖さんのどちらかがいなくても大丈夫だ。

つまり、また僕が狙われて歌えなくなっても部に影響はない。

そう考えたとき、目の前の扉が開いた。

「由宇！」

聖さんは驚愕の表情で駆け寄ってきた。後ろには透先輩と学人先輩もいる。

聖さんが肩を掴んだとき、右手に痛みが走って声が出た。

「痛っ……」

「由宇！？」

「聖、俺にまかせろ」

聖さんは後ろに下がり、学人先輩が前に立った。僕の頭を自分の肩に当て、背後を見た。後ろ手に縛られているのがわかったようだ。「右手が腫れているな……透、カッターナイフを」

透先輩はすかさずカッターナイフを学人先輩に手渡した。何で縛られているかわからないけど、カッターで切れるもののようなのだ。学人先輩はゆっくりと切っていくが、その微かな振動が骨に響いた。しかし、声は漏らさなかった。そんなことで心配させたくはない。

気を紛らわせるため、話しかけた。

「何故ここがわかったんですか？ それもこんなに早く」

「部室に来なかったから探していたんだよ。七時になって由宇の家に電話したら、まだ帰ってないって返事があつて。ああ、部活で遅くなるっていつておいたからね。で、それから何かあつたと思つて、こういう人がいない場所を探していたんだよ」

聖さんは安心させるように穏やかに言った。家族は心配していないようで良かった。聖さんなら上手く言ってくれたはずだ。

学人先輩は上手く切ったようで、手は自由になった。縛っていたのは細いビニール紐だった。手首に内出血の痕がある。改めて見てみると、右手は変色して腫れていた。思っていたよりも酷いようだ。冷静に自分の手を見た後、先輩たちの方へ向いた。聖さんは学人先輩と入れ替わって僕の前に膝を付いて目線を同じにしている。学人先輩は聖さんの後ろに立つて様子を見ているし、透先輩は怒っているようだつた。

聖さんの痛そうな表情が、右手よりも痛かった。

「大丈夫ですよ。折れているとは思いますが、こういう痛みは結構平気なんです。利き手も左手ですし」

「でも…」

「聖さん、一つ訊いてもいいですか？」

右手のことなんてどうでも良かった。折れてしまったものは仕方がない。今大事なのは、確かめることだ。

聖さんの頷きに、息を吸って呑み込んだ。あのとき言えなかった言葉を、今。

「あなたを信じてもいいですか？」

「…信じてほしいよ？ 僕は部員の味方だからね。身内は裏切らない」

一語一語を大切に、はつきりと言った聖さんの笑顔に、気が抜けた。何を心配していたのだろう。あの桜の日から、この人は嘘を吐いたことなんてなかったのに。同等の位置で見えてくれたのに。

迷いがなくなった今、人を糾弾するのに遠慮はいらなかった。文化祭というイベントでここまでする人たちを放ってはおけない。すでに少なくとも犯人の一人はわかつている。あとはまだ自信がないけど、検討はついている。

聖さんが差し出した右手に左手を乗せた。そのまま反動をつけて立ち上がる。この場所から離れたくて、聖さんに導かれるように外へ出た。月が思ったよりも明るい。右手の腕時計を見ると、短針は九時を差していた。

「由宇、俺たちはいいのか？」

学人先輩は僕の右手に触れた。一瞬痛みが走ったが、だんだん鈍い痛みになってくる。一番酷く腫れているのは人差し指と中指だ。学人先輩は確かめるように見ていた。

「聖さんが信じている人を疑いませんよ。まあ、一度疑ったことはありますけど」

「なんで？」

透先輩は怒った顔のまま訊いた。こんな状況になったことに怒っているのか、それとも僕が怪我をしたことに怒っているのか。

心配されるのが不思議だった。だって、先輩は自分のことが邪魔なはずだ。

「前、偶然学人先輩と透先輩が話しているのを聞いてしまったんです。僕と聖さんを見てるとムカツク、聖さんのことをわかっていないとか」

「それで？　聖がムカツクからってなんで由宇が私たちを疑う理由になるの？」

透先輩の女言葉に驚いた。前の話し方に慣れていたら違和感があるけど、こっちの話し方も合う。前は迫力美人だったけど、今は上品な感じだ。

それはともかく、主語が間違っていたことに気付いた。あの会話の主語は全て『聖』に置き換える。聖がムカツク、聖が浮かれている。聖は自分が特別だということをわかっていない。

なんだ、そういうことか。嫌われてなんていなかった。

「大方、自分のことだと思っていたんだろ、由宇は」

「…そうです」

「わからないでもないけどな。さて、今日は俺の家に泊まれ。俺の父が整形外科の医師なんだ。今から治療すると遅くなるだろう。君の家にも連絡を入れておく」

そう言うのと、学人先輩は鞆から携帯電話を取り出し、どこかへ電話を掛け始めた。微かに聞こえる会話は親しいもので、家族と話していると思いがついた。

正直、助かった。このまま帰ると言い訳に苦労するのは間違いない。何を言っても嘘になるのだから、帰りたくなかった。学人先輩の家、というのは気が引けるけど、今は甘えておくことにした。

ほっと息を吐くと、横で聖さんと透先輩が溜息を吐いたのが聞こえた。

「まさかここまでするとはね…本気で相手をしなくちゃ」

「ホントに。由宇を狙う辺り、目的が見えるけどね」

聖さんの低い声に、透先輩は呆れたように返した。二人とも変だ。いつもと違いすぎる。

その疑問を口に出すことができずにいると、学人先輩が戻ってきた。

「了承は得た。早く帰ろう。…由宇？ ああ、透のことか？」

学人先輩の察しの良さに頷くことで肯定すると、学人先輩はフツツと笑った。

「透が本気になったってことだ。いつも男言葉でいるのを、女言葉にすることで切り替えているんだ。透にとって男言葉は楽なだけで、女言葉も嘘じゃない。切り替えると女性らしさが前面に出て、聖に似ている感じになるだろう？」

「そうですね。でも、どちらも透先輩らしいです。演技じゃないってところが」

学人先輩は一瞬目を見開いたが、すぐに可笑しそうな笑みに変え

た。咽喉の奥で笑っている。透先輩も聞いていたようで、複雑な表情を浮かべていた。

「さあ、本当に早く帰ろう。怪我が心配だ。鞆は取ってきてあるから」

学人先輩が先に歩きだした。すぐ横に透先輩が並び、聖さんと僕は後ろを歩いた。

聖さんが持っていたもう一つの鞆は僕のものだった。なんとなくそうかな、とは思っていたけど、ここまで用意周到だとは。『ここまでするとは』ということは、ある程度予想していたということになる。

背後にあるものが見えない。『文化祭』の他に、何かが要素になっている。

17・犯人は四人で

「学人先輩、この三人を調べてもらえますか？」

学人先輩の部屋に敷かれた客用の布団に入り、座った状態で机の前に座る学人先輩に紙切れを渡した。

差し出した紙には三人の名前が書かれている。一見ランダムに書かれた名前で、共通点がないように思える。しかし、一つの系で繋がっている三人。一つの意図で、繋がっている。

学人先輩は一読して意味がするところがわかったようで、頷いただけだった。

「一人は確実なんです。でも、あとの二人は記憶と一致しただけなので曖昧です。動機は明らかなんですけど」

「わかった。まだ聖には秘密だな？」

「はい。まだ、います。この三人と結び付けた人物が。そして、その人は聖さんに関係している……」

共通点がない三人を結んだ人物がいるのは間違いない。そして、それが出来る人は限られている。有力なのがいるけど、なかなか尻尾を掴ませてくれないだろう。

学人先輩は僕の包帯の巻かれた右手に視線を落とした。

「聖は王子じゃないってことに気付いてない奴が多すぎる。その上、由宇を傷付けるなんて……聖をどうしたいんだ」

「理想にしたいんでしょう。押し付けて、それ以外を許さない。僕は見せしめですね」

嘲笑するように薄く笑うと、学人先輩は痛そうに微笑んだ。それから、椅子からベッドに移動した。もう寝る、という合図だった。

「僕で良かったんですよ。これで理由ができる。この怪我が僕と部を結んで、背後にいる人を引き摺り出せます」

「でも、これを聖は望んでいなかった。この結果が何を導くのか、誰にもわからないな」

電気が消えた。

学人先輩の「これで話は終わり」という合図に、目を閉じた。意識を失っていた時間は睡眠とは違う。目を閉じた途端に眠りに引き込まれそうになった。明日から本格的に文化祭の準備に眠りからなければならぬ。その体力を回復させることに専念した。眠りに落ちる間際、学人先輩の声が聞こえた気がした。

駅にはすでに聖さんと透先輩の姿があった。聖さんは僕を見ると嬉しそうな顔をしたが、視線が右手に移った後に苦いものに変わった。透先輩は弱く笑っている。

「おはよう。怪我はどうだったの？」

「全治一ヶ月です。文化祭には間に合いませんね」

「不幸中の幸いね……」

透先輩の呟きに、聖さんと学人先輩は頷いた。

確かに。犯人は僕が演奏できなくなればいいわけで、それが叶った今、自分は安全圏にいることになる。それは僕が文化祭に出ることを望まない人だけであって、犯人の三人の内、一人の動機は違っているところにある。

ホームに向かう途中、先頭を歩く聖さんは喧騒の中、はつきりと言った。

「とにかく、これから相手がどう動くか楽しみだね」

聖さんの声は、内容と違って硬いものだった。いつもとは違う先輩たちの雰囲気、右手に巻かれた包帯を弄んだ。この怪我がきつかけになった。もっと自分が注意していればこんなことにはならなかったかもしれない、と悔やむ気持ちがある。

いつもは聖さんから触れてくるところを、自分から聖さんの袖を引っ張った。

「聖さん、僕は文化祭を成功させたいです。それを優先してくれませんか？」

おずおずと言うと、聖さんは笑顔でもちろん、と頷いた。

犯人を捜すよりも、文化祭でのバンドを成功させることに重点を置いて欲しかった。犯人に検討がついている分、聖さんには知って欲しくなかった。それがただ先延ばしにするだけであっても。

「由宇が一緒の最初で最後の文化祭だからね。成功させるよ」

そのあとに言葉が続いたようだったが、電車がホームに入ってくる音に消されて届かなかった。近くにいた学人先輩には聞こえたようで、表情が硬くなった。何かが始まるうとしている。それは決心の表情だった。

電車の中では、バンドで何を演奏するかの話題だけだった。優先するのは文化祭の演目の方、と決めた以上、それに専念することにした。それは表面上だけであっても。

学校に着くまでに、楽器のパートと大体の曲目は決まった。曲については、時間配分、練習量を考えて、三曲が妥当になる。話に出たのは五曲だから、二曲は省かなければならない。でも、どれも捨て難かった。いざとなったら、五曲全部やってもいいかもしれない、と話が落ち着こうとしたところに、校門近くで騒いでいる声が聞こえた。発生源はまた、あの掲示板だった。

「ちよつと見せてくれる？」

掲示板に群がる生徒の中を、聖さんは得意の笑顔で掻き分けていった。聖さんの後を透先輩、僕、学人先輩と続く。掲示板の前に着いて見上げると、そこには号外新聞が貼ってあった。

『万屋の新人・須賀由宇が手を負傷！ 文化祭でのバンドに参加できるのか！？』という見出しで始まる記事は、詳細が書かれていた。それによると、学人先輩からの「由宇をメインにする」というインタビュー結果から号外が出されたようだった。右手を負傷、とはつきり書いてある。

隣に立つ学人先輩にだけ聞こえるように言った。

「これで一人、確定ですね」

「そうだな。これなら結構ボロが出るかもしれないな」

学人先輩に頷いた。

昨日の出来事を知っているのは犯人以外に有り得ない。放課後、人通りのないところで行われた暴行。負傷しているのは右手、と断定しているところから確実だった。

新聞部に犯人がいる。そして、それは昨日紙に書いた人物。あの

『覆面と標準体型の男子』に当てはまる。

「透、佐川を調べてくれないか？俺だと警戒されるからな。最初の取材を断ったから」

「わかった。あの子も万屋を变に特別視してたから、気になってたの」

透先輩は二つ返事で引き受けた。佐川に近付けるのは透先輩だけだった。聖さんでも、『王子』としての存在が邪魔をする。

佐川に関してはあと一つ、僕にも確かめられることがあった。

19・クラスメイトたちが

教室に入ると、一斉に視線が集まった。同情する目が多数の中、明らかに負の感情が混じったものがあつた。それは当然に受ける罰だと言っているようなもので。

そんなことに動じるほど、決心した事は軽くなかつた。

クラスメイトの反応を無視し、一人の生徒の方へと向かつた。

「妹尾さん、ちょっといいかな？」

声をかけられた妹尾は大きく肩を震わせた。しかし、それはすぐに軽蔑の表情に変わった。

「何？」

「妹尾さんは今日の号外を知つてた？ 新聞部に入つたんだよね」

何故それを知っているのか、と顔に出した妹尾に、笑みで答えた。情報網を甘く見てもらつては困る。『万屋』はほぼ全部といっていいほど部活のことは把握していた。誰がどの部にいるかなんて些細なことだ。

妹尾は溜息を吐いた。

「知らなかつたわよ。朝部長に聞いたら、昨日急いで二、三年生で作つたつて」

「ありがとう。記事を書いた人は知らなかつたみたいだけど、僕の利き手は左手なんだ」

妹尾はそう、と弱い笑みを返した。その笑みの理由はわからなかつた。「利き手を怪我したんじゃなくてよかつた」なのか、「情報をありがとう」なのか。それ以外かもしれない。

しかし、はつきりしたことがある。

昨日のことに関わつたのは二、三年生。そして、検討をつけていた新聞部員。

犯人の一人、佐川が確定した。

放課後、いつものように部室へ向かおうとした僕の肩を真弓が掴んだ。

「真弓くん…何か用？」

問いかけに、真弓は逡巡した。言っのを躊躇っているようだったので待った。少しくらい部活に遅れてもかまわない。

真弓は重い口を開いた。

「一宮さんには気を付けてください」

「学人先輩に？ 何で？」

「…あの人は須賀くんの怪我に関わっていると思うんです」

思う、と言ったが、表情からはそうに違いないという確信があるように感じた。また「何で？」と返しそうになったが、聞いたところで真弓は答えてくれない。

ただ頷くことで答えた。真弓は安心したのか、いつもより少しぎこちない笑みを浮かべて去っていった。

発見されたときのあの学人先輩の心配そうにしていた様子は嘘だったのか。治療して家にまで泊めてくれたあの人が。

学人先輩を信じると、真弓が嘘を言ったことになる。しかし、真弓は何もなしにあんなことは言わないだろう。

どちらも信じたい。しかし、どちらも信じると結論は出ない。

複雑な思いを抱いたまま、部室へ向かった。

20・調理室で

「手伝いは今日で終わりにしますね」

調理器具の片付けが終わり、手を拭いているところで切り出した。先輩たちには先に部室に戻ってもらっていて、調理室には久保部長しか残っていない。

久保部長は驚いたように振り返った。

「なんで…まだ廃部までは時間があるじゃない」

「あなたが僕を殴ったからですよ」

目を逸らさなかった。久保部長の瞳が揺れたのが見えた。

確信した。あのとき、背後から殴ったのは久保部長だ。

「何を言ってるの？」

「香りがしたんですよ。僕が用意した茶葉の香りが。あの茶葉は特製で、あのときあの匂いを纏えたのは、あなたしかいないんです」
自分が作ったからこそ、間違いようがなかった。あの香りは、僕しか作れない。

「そんなこと…」

「認めてください。僕しかいないこの場で。今ならなかったことにできますから！」

先輩たちに言う前に、認めてほしかった。今なら、まだ許せる。

それを信じたのか、諦めただけなのか、久保部長は一度目を伏せてから視線を合わせた。

「だから伊集院くんたちを先に帰らせたのね…。そう、あなたを渡り廊下で殴ったのは私よ」

「殴っただけ、ですよ。薬を嗅がせてないし、こうなることも知らなかった」

右手を掲げると、久保部長は目を見開いて頷いた。

「そう！ 靴箱に『須賀由宇を殴って意識を失わせる』って書いたメモがあつて」

「それを実行したのは何故ですか？」

紙切れ一枚で、実行できた理由。なんとなくわかる。それは何度も聞いたことのあるもののはずだ。

「妬ましかった。何もせずに万屋に入れたあなたが。伊集院さんの近くにいれるあなたが。だから、あのときメモを見て、チャンスだっと思った」

久保部長は下唇を噛み、握り締めた布巾から滴が落ちた。

行き場のない悪意は誘惑に負け、悪魔の囁きに頷いてしまった。

一歩間違えると、とんでもない結果になっていた。気絶させるくらいの衝撃を調整するなんて、簡単にできるはずがなかった。今回はたまたま上手くいっただけだ。最悪の結果は、いつでも用意されている。

「僕が死んでもいいって思いましたか？」

「それはない！ 嫌がらせをしたかっただけよ。頭を殴っただけよ。言う台詞じゃないけど」

殺意がなかったただけ良かった。本当に殴るだけだった。

その後何があるかを知らずに。

「あなたがやったということが先輩たちにバレたらって思いませんでしたか？」

「あのときは思わなかった……やった後になんでこんなことをしてしまったんだろうって思ったけど」

後悔しても、やったことをなかったことにはできない。それを非難されても、正当化する理由なんてなかった。先輩たちを理由にしても、その結果を先輩は望んでいない。その結果を、許さない。

言ったことはちゃんと守る。久保部長は正直に話してくれたから、殴ったことはなかったことにする。

「殴ったことはもういいです。先輩にも言いません。僕が許せないのはメモを書いた人物、黒幕ですから」

布巾をパンツと広げ、手摺りに掛けた。

もう話は終わり。料理部の助っ人も終わり。もう、関わることは

ない。

「では、失礼します」

結局、最後まで久保部長には笑顔が向けられなかった。久保部長の本当の言葉が聞けなかった。背景には聖さんへの恋心が見えていたけど。

一礼してから背を向けた。

「ごめんなさい…ありがとう」

振り返らなかった。ただ、料理に対する気持ちだけは認めようと思った。

「そういうことだったんだね」

横からかかった声に、叫びそうになった。なんとか口を手で押さえて声を呑み込んだ。

タイミングが良すぎる。今ここで声を出すと、久保部長に気付かれる。

壁に凭れている聖さんに目で合図し、調理室から離れた。

「聖さん…」

「大丈夫だよ。久保さんは許すから。由宇がそう決めたなら、何も言わない」

大人の笑みに、全部知られているように感じた。

聖さんはどこまで知っているのか。そして、どこまで先を読んでいるのか。

笑顔からは何も読み取れなかった。

「久保さんの気持ちには気付いていたよ。でも、それは恋じゃない。『恋したい』という願望だけだったんだよ」

久保部長の聖さんに対する視線や言葉、仕草は恋をしているように見えた。でも、それを聖さんは『願望』だと言った。

わかる気がした。皆の『理想』の聖さんに『恋をしたい』。それは自分の『理想』になる。久保部長は自分自身『恋をしている』気持ちだったのかもしれないけど、それはただの『願望』で偽物だった。

た。

気付かないのが幸せなのか、知らないのは愚かなのか。

「そういうのは多いからね。放っておいた。その結果がこうなったけど」

聖さんの視線が右手に向いた。固定された右手の包袋は白く。目に痛かった。

「ごめん。この結果は僕のせいだ」

「謝らないでください。油断していた僕も悪いんです。それに、僕は万屋の部員ですよ？文化祭で優勝するんですよ？」

「…そうだよ。このままでは終わらせない」

聖さんの言葉は、万屋の目標になり指針となる。

久保部長を除いた二人の犯人。佐川は確定しているため、実行犯はあと一人。もう予想はついている。

残るのは、久保部長にメモを渡し、佐川たちを仕向けた黒幕だけだ。

21・閑話休題

「やっぱ両立って難しいな」

楽しそうな声に、自然と笑みが漏れた。携帯電話の液晶には『^な名波^{なみさくら}咲良』と表示されている。

中学での唯一の友達。彼は僕を『親友』だと言った。

「『佐倉七海^{さくら ななみ}』には慣れた？」

「まあな。高校でもそう呼ばれるからな」

『佐倉七海』として芸能界に入った咲良は、モデルからの三年間のブランクを感じさせずにアイドルとなっていた。三年間、普通の中学生でいた咲良は確かに成長していた。それを近くで見ていたからよくわかる。

「由宇は友達できた？」

「まだだよ。一人友達になりたい人はいるけど、ちょっと難しいかな。顔は整ってるけどね」

『由宇は顔が整っている人に好かれる』と言ったのは咲良だった。

茶化して言ったのに、咲良の反応は鈍かった。

「友達はいない？ そんなはず…学年が違うからか…」

明らかな独り言に、返答しないでいた。僕に友達がいけないことは変なことではない。中学では、咲良と友達になる一年の二学期までいなかった。それを知っている咲良が、何故。

「まあいいや。友達ができたら紹介してくれよ」

「もちろん。咲良もちゃんと仲良しな人を作るんだよ」

「わかってる。あ、加納サンが呼んでるから切るな」

咲良のマネージャー、加納さんが控えめに呼ぶ声が微かに聞こえた。

「うん。頑張ってね」

「お前も頑張れよ！」

咲良の励ましが、単純に嬉しかった。

22・体育館とプールの間の道で

右手の痛みは気にならなくなっていた。固定されていて不便だと感じるだけで。

歌う曲も決まり、文化祭に向けて個人で練習している。万屋が何をするか、本番まで秘密にすることを先輩たちと決めた。そのため、学校では練習できなかった。音合わせをするときは、学人先輩の家に集まる。

文化祭まであと七日。

「お前は文化祭に出るな」

低い声に振り返ると、短い髪を金色に染めて立てている、見た目不良が睨んでいた。その隣には優等生の見本のような線の細い男子もいる。

「なんで？」

「お、お前が出なければ、またあの三人の催しが見れるんだ！あの人たち三人が万屋なんだ！」

またか。優等生がヒステリックに叫ぶのが煩わしかった。耳が痛い。優等生だからこそ、キレると加減ができないのかもしれない。

万屋に僕はいらない。それは何度も言われてきたことだった。

決心した今、その意見は聞き入れられないけど。

「文化祭でやることは、もう完成してるんだけど」

「お前がいなくなっても変わらないだろ。右手は使えないんだろ？」

不良がニタニタと笑った。気持ち悪い。悪意と優劣感が混じっていて不快だった。

「その右手が、お前がいらない証拠なんだ！」

確かに『僕はいらない』と思う奴が右手を折った。さすが優等生、と変なところで感心した。

厄介なことは逃げるのが一番良い解決策だ。人通りのない体育館とプールの間の道は逃げ道が一つしかなかった。一步後退して逃げ

るタイミングを計っていると、後ろから足音が聞こえた。

「逃げられると思ったか？」

愉快そうな笑い声に、肩を落として振り返った。

いかにも暴力を振るうことに慣れている様子で、三人の男子が立っている。金髪の仲間だ。優等生は戦力外として、四対一の構図になった。

勝利を確信した汚い笑みが取り巻く中、ため息を吐いた。

「めんどくさい…」

「はあ？ 何言っちゃってんの？ 諦めたんですかー？」

「呆れたんですよ」

動物の鳴き声のように甲高い笑い声にかぶせて言った。同時に、足に力を入れて構えた。

四人なら、大丈夫。右手のハンデで丁度良いくらいだ。

「まだどうにかなると思ってるのか？ 後で後悔するんだな」

後で悔やむから後悔なんだよ。口に出さずに指摘して、殴りかかってきた男子を避け、カウンターで鳩尾を殴った。腹を押さえて膝を付き、呻いている。それに苛立ったのか、残りの三人が一斉に向かってきた。

一斉に来るということは、その分巻き込みやすい。

まず、向かってきた拳を避け、腕を持って体勢を崩した。

それに巻き込まれた男子の横腹に回し蹴りを入れ、体勢を崩した方の背中に肘を落とした。

残った一人は仲間が次々と倒れていくのに怯んだのか、足を止めている。向かってこないなら、何もしない。

「お前…なんで…」

「合気道と空手をやってたからね。どうする？ まだやる？」

「おい、話が違っじゃねえか！ こんなんやってられっか！」

呻く仲間を置き去りにして、不良は逃げた。残ったのは優等生だけだ。呆然としている。何が起こったのか、理解できていないのだろう。

倒れた三人がまた向かってこないか様子を見ながら、一步下がった。

「由宇、やるわねー」

「そんな特技あつたんだねー」

声が降つてきた方を見ると、体育館の二階の窓から透先輩と聖さんが顔を出していた。

そうか。今日は二人共、運動部の助っ人をしていたんだ。

「いつから見えてたんですか？」

「『お前が出なければ』ってところから」

優等生のヒステリーから見ていたわけだ。ヒステリーだから気づいたのかもしれない。

しかし、ただ見ていたのは何故か。

「助けてくれなかったのは何故ですか？」

「由宇、余裕あるみたいだったからねー。様子を見ようってことで結果は見てのとおりだし」

ホラ、と聖さんが指で示した先には、まだうずくまっている不良たちがいた。情けない。手を折られるよりは痛くないのに。

突然現れた聖さんと透先輩に目を見開いた優等生がまだ動かずに居た。

「その君ー由宇に手を出すなんて、よくもやってくれたね？ 右手の件でもかなりム力ついてるんだけど」

「万屋を敵に回したと看做すわね」

笑顔なのに、怒りが滲んでいた。絵で表すなら血管が浮いている状態だ。目が笑っていない笑みは、単純な怒りよりも怖かった。

部員の僕でもそう思うのだから、優等生はもっと恐怖を感じているだろう。

聖さんたちのためにやったことだと思っているなら尚更。

「由宇を傷つけようとする者は誰であろうと許さないよ。僕たちを理由にするな。それはエゴだと知れ」

まるで王のように堂々と。断罪するかのようなその姿は。

今まで見た誰よりも気高く見えた。

「由宇、一応今日は学人の家に寄って右手を診てもらおう。もう切り上げるから、先に部室に行つてて」

「わかりました」

バイバイ、と手を降つて中に戻つた聖さんと透先輩を見送り、視線を優等生に向けた。

ブツブツ何かを呟いている。

僕は悪くない。伊集院さんのためにやったんだ。須賀が悪いんだ。微かに聞き取れる言葉に胸が痛んだが、聖さんの言葉がそれを消した。

僕は万屋の一員なんだ。

23・美術室で

文化祭が近付くにつれ、時折右手がズキズキと鈍く痛んだ。精神的に圧迫されている気がする。

文化祭まであと三日しか残っていない。それなのに、犯人はまだわかっていなかった。佐川を泳がせていても、残りの一人に確信が持てなかった。警戒しているのか、あれから動きはない。黒幕も大人しくしていた。

真弓の忠告通り学人先輩に注意を向けていたが、変わったところはない。何も変化がないまま、時間だけが過ぎていく。聖さんたちは裏で動いているようだったが、僕には知らされていない。知らない方が安全だから、という配慮からだ。今僕にできることは、歌を仕上げることだけだ。

何か起こるとしたら、文化祭前日か当日になるだろうことは予想できた。

固定された右手が煩わしかった。上手く腕が振れない。万全の体調ならばもっと速く、もっと長く走れた。でも、今はもう息が切れってきた。

足手まといになっている。

「由宇、美術室に入るよ」

並んで走る聖さんが教室を指で示した。教室に入ると逃げ場がなくなる。しかし、このまま走っていても捕まることは確定していた。それなら、聖さんの指示に従う方が良いに決まっている。

油絵特有の臭いが漂う教室で、薄いカーテンが靡く窓側へと寄った。

開かれたドアから、捕獲者が姿を現した。

「ゲームオーバーだ、伊集院」

ニヤリと楽しそうに笑う顔は、本当の彼を表しているようだった。

24・文化祭で

新聞部部長。片岸部長が黒幕だった。

「まだわからないよ」

「お前たちが出られないのに？ お前さえいなければ、優勝は俺のものだ」

顔を歪めて笑う様は、嘲るというよりも愚かな印象が強かった。何度も見てきた表情だ。人が他人を見下し、優越感に浸るとき、自分が正義だと思ふとき。そんなときに見てきた顔だった。

それが嫌で、いつも吐き気がした。

「なんでそんなに優勝に拘るんですか？」

「知らないのか？ 『文化祭で優勝すると、内申書の評価が上がる』噂を。伊集院が入学する前の文化祭で優勝した人たちは、成績以上の大学へ行っているんだ」

「そんなことで……」

そんなことで手を折られたなんて。今なら遠慮なく殴れそうな気がした。

それよりも、今はステージに行くことが重要だった。このまま終わりにたくない。

「ホント、『そんなことで』だよ。噂にすぎないのに」

「噂が本当かどうかは優勝してみればいいんだ。須賀はたまたま標的になっただけで、運が悪かったな」

ハハハッと愉快そうに片岸部長が笑うのと同時に、隣から舌打ちが聞こえた。

聖さんが無表情で片岸部長を見ている。

その姿はいつも以上に気高く。

大丈夫、なんとかなる。そう、強く思った。

「たまたま？」

「ああ。お前や戌亥を怪我させたことを知られると、後が怖いから

な。須賀なら皆不満があるからちようど良かった」

意外と頭良いんだ。冷静にそう思った。

皆が僕に不満を持っていることは知っていた。それほどの影響力を、万屋のメンバーは持っていた。それは『聖の親戚』だけじゃ補えないもので。万屋の存在を揺るがすもので。

だから、襲われたのが僕で良かった。

「さあ、話すことはもうないな？ 須賀に恨みを持つてるやつなんて他にもいるんだ。伊集院はそこで見ていればいい」

片岸部長の後ろに佐川と数名の男子が現れた。中には矢野もいる。出口は塞がれた。彼らの勝利を確信した笑みに、吐き気がした。

「聖さん、この人数だとかなりますけど」

「うん。君の実力は知っている。でも時間がないからね。ステージに上がる準備はできてる？」

につこりと、この場に合わない笑顔は綺麗だった。まだ、終わじゃない。

歌う準備はできている。歌い慣れたあの歌を、歌わないまま終われない。

「もう間に合わない。諦めるんだな」

「由宇、外に向かってサビを歌うんだ！」

片岸部長が示した時刻、ステージに上がる時刻に、聖さんはカーテンを引いて叫んだ。

広がる空が青くて。声が、何処までも届く気がした。

片翼の君が望むモノは翼ではなく

青い空だった

白い羽根が雲に溶けて

どこまでも飛んでいける気がした

サビを歌いきり、ホッと息を吐くと、突然左手を掴まれた。

「さあ、僕たちの出番だよ！」

聖さんの宣言の後、窓の下から歓声が聞こえた。

美術室はグラウンドに面していて、ステージが中央にあるのが見えた。そのステージ上で、透先輩が弓を掲げて弾く合図をしたのが微かにわかった。

高い、澄んだ音色と共に歓声が止む。階下を見ると、ハイジャンプのマットが用意されていた。

「片岸、ゲームは終わりだよ。これから見るのは現実だ」

聖さんが窓枠に片足を掛けたのを合図に、繋がれた左手をそのままに窓枠に飛び乗った。

翼なんてないけど、空を飛べる気がした。

聖さんに手を引かれ、ふわりと、一瞬だけ飛んだ気がした。

二階の高さはあつという間で、衝撃はほとんどマットに吸収された。

「由宇、行くよっ！」

繋がれたままの左手を引かれてマットから飛び降りた。

自然に出来たステージへと続く道を走る。息は切れない。これから、始まる。

さよならの言葉は終わりじゃなく
始まりだった

透先輩のバイオリンと学人先輩の電子ピアノの音と聖さんの歌声が。

空に届く気がして。

久しぶりに本当に心の底から笑えた。

25・文化祭の後で

聖さんと透先輩が写真撮影に捕まっている中を抜け出し、学人先輩と二人部室に戻った。

二人きりの状況は、今しかない。残っていた疑問を投げかけた。

「学人先輩は初めから犯人を知っていたんですか？」

「片岸はな。いつか行動を起こすと思っていた。まさか由宇に対してここまでするとは思わなかったが」

悔しそうに眉を寄せ、学人先輩は中指で眼鏡を押し上げた。

なんとなくわかった。真弓の忠告は、片岸部長と学人先輩が話していたのを見たことから始まるのだろう。号外発行のタイミングから犯人が推測でき、片岸部長と学人先輩の話の内容がそれを後押ししたのだと考えられた。

「片岸さんと何を話したんですか？」

「聖が由宇を気に入ってるって。大切にしてるって話したな。…だから余計に傷付けられたのかもしれないな」

「学人先輩が助けてくれたから、良いです。それに優勝できましたし。ところで噂の真相は？」

「噂は噂。内申点なんて嘘なのよ」

いつから居たのか、入り口には緑川会長が立っていた。その横には聖さんもいる。

「噂が変に広まらないように、伊集院くんたちに協力してもらったの。三年連続優勝したら噂の真相は謎のままだから、過剰な争いはなくなると思ってね」

会長はそつと僕の右手を取った。優しい扱いに、彼女も後悔していることが伝わった。この右手は犠牲の象徴になっている。

この事件は、どこかに捌け口が必要だった。それが僕に向かってきて、右手の怪我だけで済んだのだから、悪くない結果だと思う。

「そういうことだったんですか。だから、会長が部室にいたときは

先輩の表情が変だったんですね」

会長はそのときの状況を思い出したのか愉快そうに笑った。それに対して、透先輩は顔をしかめ、学人先輩はため息をつき、聖さんは会長と同じように笑った。

「二人とも、あからさまだったよねー。今回は自由にやりたかったのはわかるけど、会長に失礼だったよ」

「聖さんも表情は固かったんですけど」

「由宇の責任が重くなるなって思って。優勝なんて考えずに、気楽に楽しくやりたかったから」

「会長のことは信頼してるし嫌いじゃないけど、由宇と一緒に最初で最後の文化祭だったから。まあ、楽しめたけど」

透先輩のぶすつとした言い方に、思わず吹き出した。なんだか小さな子供みたいだ。でも、それは本当の意見だと感じられた。

悪意に満ちた文化祭までの道のりが。右手を折られたことさえも。全て今日という日のためにあったと思えた。

「僕も楽しかったです。ありがとうございました」

お辞儀をして顔を上げると、会長を含めた四人の笑顔があった。

26・さよならの言葉が残った

「入試の日に君を見かけたんだよ」

まだ蕾の桜は、入試の日に見たものと同じだった。確かな手応えを感じた入試で、入学式の日ここに来ようと思っていたのが懐かしい。

「まだ咲いていない桜を見て、君があまりにも優しく笑うから」

笑っていたのは無自覚だった。空が青くて、早く咲けばいいなと思っていた。桜と同じ音を持つ彼のように。

「気にはなっていたんだよ。桜と同じ音の名前の従兄弟に君のことを聞いたときは、驚いたけど嬉しかった」

「同じ音：咲良ですか？」

発音の違いでわかったのか、聖さんは頷いた。

名波咲良。中学での唯一の友達。彼が聖さんの従兄弟だったなんて。咲良が前に電話で呟いていたのはこのことだったのか。

咲良は一体何を言ったのか。

遅い粉雪が舞う中、聖さんは穏やかに微笑んだ。

「咲良が親友が僕の学校を受験したって話したのがきっかけだね。そういえば、桜の木の下で受験生を見かけたって話したら、ピンときたみたいで。君の写真のを見せてくれたよ。須賀由宇だって教えてくれた」

咲良なら僕の写真を持っているだろう。それで僕の名前を知っていたのか。

あの入学式で、聖さんは確かに僕を知っていたんだ。

「咲良は他に何か言っていましたか？」

「『俺の親友なんだ』って強調された。それで十分だったよ。咲良の親友なら、僕も気に入るに決まってる」

咲良の親友の須賀由宇。認識はそこから始まっていた。今思うと、聖さんは咲良に似ていた。

多くの人に好かれているけど、その中で特別な人がいる。聖さんにとっては学人先輩と透先輩で、咲良にとっては中学では僕だった。『咲良の親友』はどうでしたか？」

「『後輩の由宇』は予想以上だったよ。前に親友の話として学力と中華料理の腕は咲良から聞いていたけど、歌のことは聞いてなかったし。合気道もだね。すぐに好きになったよ。咲良と同じくらいには」

咲良と同じ。従兄弟と同じだなんて、最高の褒め言葉だった。それ以上の好意は負担で、それ以下ならただの部活の後輩になる。

「学人と透も同じだと思うよ。詳しいことは話してないのに、自然に接していたから。」

「今、学人先輩と透先輩は？」

「先に帰ったよ。お別れの言葉はいらないからって」

卒業おめでとうございます。今までありがとうございました。その言葉は今日、何度も言っただし、聞いた。

もう学校で会えないから。もしかしたら、もう会うこともないかもしれないから。

それは確かな別れの言葉だった。

そんな言葉は、先輩たちにはいらない。

「また会えますよね」

「また会えるよ。由宇の卒業式の日、ここに来るから」

始まりの場所で、また新しく始まる。風が強く吹いて粉雪が視界を覆う中、聖さんは出会ったときと同じように笑った。

「さよなら。二年後に、また」

さよならの言葉は終わりじゃなくて、始まりだった。

聖さんの歌声が聞こえた気がした。

エピローグ：卒業式（2年後）

「卒業おめでとう」

約束の日に、再会した。

卒業式の終了間際、卒業生退場合図前の静寂の中、体育館に澄んだテノールが響いた。

生徒は一斉に後ろを振り向いた。

「聖さん……」

「キャー王子様よ！」

呟きは甲高い女子の声に掻き消された。男子の低い声も混じっている。大半は卒業生のもので、訳の分からない在校生や観覧席の保護者は卒業生の騒ぎ振りに呆然としていた。一部の在校生は、訳が分からないながらも聖さんの笑みに騒いでいる。

その大音量の歓声は、遅れて入ってきた三人で一層強まった。在校生や保護者も加わって、收拾がつかない。

入ってきた三人。学人先輩と、透先輩と。

「なんで咲良まで……」

「佐倉七海！？ キャー！！！」

卒業した有名人に加え、今人気急上昇のアイドルが現れ、体育館は騒然となった。

二年前、卒業式に再会の約束をしたのは聖さんだけ。学人先輩と透先輩は聖さんと一緒に来るかな、とは思ったけど、咲良は予想外だ。

耳に痛い声が渦巻く中、通路に出て聖さんと向かい合った。視線が集中して、嫌な感じがする。それでも、僕が行かないとこの場はどうにもならない。

「聖さん……」

「うん。校長先生には許可はとってるけど、説明しないとね」

聖さんは通路を進み、壇上へ向かった。歩く姿が綺麗だった。王子様と言われていた、二年前と変わっていない。二年前より大人の顔つきになったけど、雰囲気は前のままだった。王子様と呼ばれるに価する品格が漂っている。

近付いてくる聖さんに、卒業生は芸能人に会ったかのように叫んでいた。

「校長先生の許可を取ってたんですね」

「ああ。『万屋』で卒業生を祝いたいという理由で」

僕の隣で聖さんの後ろ姿を見ていた学人先輩は、口の端を上げた。学人先輩と聖さんが組めば、許可を取るくらい簡単だろう。そのくらい二人は影響力があり、『万屋』は特別だった。

部員だった頃の、学人先輩とのこの遣り取りが、懐かしかった。

「で、咲良は何で来たの」

「親友の卒業式に来たかったから。聖さんに卒業式のことを聞いて、一緒に行きたいって言ったら連れてきてくれた」

帽子やサングラスなどの変装を一切していない咲良はにつこりと笑った。その笑顔は友達の僕だから見せるもので。初めて見た周りの生徒はまたキヤーキヤーと騒ぎ出した。

咲良が来てくれたのは嬉しい。でも、この状況は気分が悪かった。

「僕だけ帰ろうかな……」

「それじゃ意味がないだろ」

三人の声が重なり、その後にマイクのスイッチが入った音がした。「静かにしてください」

聖さんの澄んだ声がスピーカーから聞こえた。余韻を残し、歓声は消えた。

命令ではないのに、従いたくなる。それは二年前に見たものと同じだった。文化祭で、人だかりの中に出て一本の道。それはステージに続いていた。聖さんのために、自然と出来た道。それを二人で走り抜けたのを覚えている。

いつの間にかステージの真ん中にスタンドマイクが置かれ、聖さ

んはそこに立っていた。

「卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。在校生及び観覧席のみなさん、初めまして。二年前に卒業しました、伊集院聖と申します。この場をお借りして、卒業生をお祝いしたいと思います」

一旦区切り、聖さんは手招きした。それを合図に、学人先輩と透先輩は壇上へ向かい、僕は咲良に背中を押されて後に続いた。

「ここで卒業式の終了としますので、退場される方はご自由にどうぞ。ただ今から『万屋』と佐倉七海によるコンサートを開催します」

聖さんの宣言に、一斉に歓声と拍手が起こった。校長先生は楽しそうに見守り、他の先生は呆れたり苦笑していたりした。そういえば、この場にいる先生は二年前からいる人ばかりだ。つまり、『万屋』を知らない人はいない。

卒業式は終わったにもかかわらず、退場する人はいなかった。体育館の扉は一度も開かなかった。

ステージに全員揃い、聖さんの後ろに学人先輩、透先輩、僕と並び、聖さんの横に咲良が立った。

「佐倉七海についてですが、彼は僕の従兄弟です。『万屋』部員、須賀由宇の中学からの親友でもあるので、この場に呼んでみました」

「こんにちは、佐倉七海です。みなさん、ご卒業おめでとうございます。これから高校を旅立つみなさんへ、『さよならの言葉』を送ります」

文化祭で『万屋』が歌った歌だ。学人先輩は国歌と校歌を演奏するために置かれていたピアノに座り、透先輩はステージ横から渡されたバイオリンを受け取って準備した。

咲良はスタンドからマイクを外し、僕は聖さんからコードレスマイクを渡された。

「由宇は卒業生ですが、歌ってもいいですよね？」

聖さんの確認に、拍手で多くの賛成が得られた。卒業生の一部は嫌な顔をしていたが、それは周りの歓喜の笑みで気にならなかった。僕は『万屋』の一員だ。もう迷わない。在校生と保護者は反対して

いなかった。

「じゃあ由宇、前と同じように歌って」

「…咲良とは打ち合わせ済みですか」

「俺も由宇の歌が聴きたいから」

聖さんと咲良に挟まれ、なんとも言えない気分になった。親友と、先輩と。この状況は、悪くない。

マイクの電源を落とし、息を吸い込んだ。

「片翼の君が望むモノは翼ではなく、青い空だった」

しんと静まった体育館に、マイクを通さない声が響いた。今自分が出せる、最高の声を、歌を。

「白い羽根が雲に溶けて、どこまでも飛んでいける気がした」

最後の音を伸ばし、フェードアウトしたところに学人先輩のピアノと透先輩のバイオリンの音が重なった。その後、拍手だけが起った。

二年前の文化祭と似ていた。咲良が加わっただけで、他は同じだった。マイクのスイッチを入れ、聖さんの歌を待った。

「さよならの言葉は終わりじゃなくて、始まりだった」

聖さんの歌声も変わっていない。あのときは、ステージへ向かいながら歌っていた。マイクを通しているから、あのときよりもしっかりと聞こえる。

「違う道を進んでも、きっとまた会えるから」

咲良の歌声は、成長していた。デビュー曲と比べると、しっかり声が出ていて安定している。咲良も自覚しているのか、僕を見て苦笑した。

聖さんと咲良は練習したのか、文化祭で聖さんが歌っていたパートを交互に歌い、途中は一緒に歌って上手くハモっていた。

「僕らはみんな片翼で、一人では飛べない」

「だからいつか会えるその日まで、僕は進んでいく」

「本当に欲しいのは翼じゃない。望みはただ一つ」

聖さんと咲良の視線が僕に向いた。

大丈夫。この二人となら、上手く歌える。

「立ち止まらないでいられるように」

綺麗に重なった声は、ピアノとバイオリンとも上手く調和した。二年のブランクを感じさせない歌は、終わりまで安定していた。『万屋』と咲良。僕にとって、最高の卒業祝いだった。

聖さんと咲良の声に合わせながら、卒業生の席に視線を向けた。クラスの列にいる、高校での親友が笑って見ていた。目が合うと、小さく手を振ってくれて。

泣きそうになるくらい、幸せだった。

エピソード：卒業式（2年後）（後書き）

高校での親友は、『紅に沈んだ言葉』の小百合、智哉、夏目です。

おまけ：卒業式（2年後）その後

「咲良も来るなんて：仕返ししてやろうかな」

以前と同様、聖さん透先輩、それに加えて咲良が生徒と保護者に囲まれている中、学人先輩だけは抜け出して僕の隣に立って様子を眺めていた。

今回は、小百合と智哉も在校生に囲まれている。同級生は二人の性格をある程度知っているため、遠巻きに見ていた。二人は在校生相手だと、得意の毒舌やあしらいが出来ないようだった。

助けるつもりはない。最後の思い出くらい、作らせてあげても良いだろう。夏目も隣で苦笑しながら見ていた。

「仕返して具体的にどういことをするんだ？」

先ほどの弦きを拾った学人先輩は、面白そうに口の端を上げて聞いた。先輩は変わっていない。前もこんな風に弦きを拾われた。

「咲良の高校の卒業式の日、『天使』として行ってやろうかと」
「なるほど。『天使』ですか」

夏目も楽しそうに笑顔になった。

『天使』。それは咲良が作ったもう一人の僕だった。

昨年、ある生放送の音楽番組で、直前にゲストの体調が悪くなりたまたまスタジオ近くにいた咲良が代わりに出演することになった。そのゲスト程の視聴率をデビュー2年目の咲良が取れるわけもなく、咲良は僕に助けを求めた。咲良の頼みで一緒に出演することになり、マネージャーの加納さんの提案で正体を隠すために白いフード付きのコートを着た。

そして、登場した時に、咲良が言った「天使の歌声を聞かせてやるよ」が、『天使』という名前の由来となった。

その一度しかテレビに出てないのに、まだ影響は残っている。

「今回と同じようなことになりそうだな」

「学人先輩、協力してくださいね」

「勿論。聖も連れて行ってやるな。由宇のことは隠しておいて」

学人先輩は策士の笑みで、人差し指を立てた。

「僕も行つていいですか？」

「うん。みんなで見に行こう」

夏目に笑みを向けると、夏目は安心したように笑った。

夏目はもう仲間だ。咲良の卒業式に、万屋部員と小百合、智哉、夏目と行く。違う意味で騒ぎになりそうだが、楽しみだった。

高校で得たものは多く、かけがえのないものになったことを実感した。

25・5・卒業式

卒業式が終わった。

聖さんたち『万屋』は特に何もしないまま、例年通り式は進行した。卒業生挨拶も生徒会長で、校歌斉唱も生徒全員で行われた。卒業式には何かがある、と噂されていただけに、落胆した様子の人が多くいた。

まあ、期待する気持ちはわかるけど。

最後の挨拶をしようと残っている生徒は多数いたが、聖さん、学人先輩、透先輩は校長先生に連れられて校長室に行ってしまった。それを見送ってから、僕は人込みに紛れてこっそりと保健室へ向かった。

職員室では卒業生が教師に最後の挨拶をしているため、待機場所としてはふさわしくない。保健室の主、養護教諭の『保健室の先生』は、職員室に移動していた。打ち合わせ通りだった。

保健室で30分待機。これから起こることに緊張しているが、期待もしていた。これが最後。絶対に失敗できない。

集中していたためか、30分は短く感じた。軽いノックの後に開かれた扉の前には武藤先生が立っていた。武藤先生が迎えにくる役目だった。

「さあ行こう」

「はい」

会話はそれだけだった。今はそれだけで良かった。

武藤先生と並んで校長室へ向かった。校長室の前では、諦めきれない生徒で溢れていたが、僕は武藤先生に従って中に入った。

四人の目が僕を捕らえた。

「由宇、準備はいい？」

聖さんがソファから立ち上がり、僕に向かって手を差し延べた。久しぶりに会った聖さんは、あの時と同じ顔をしていた。

万屋の最後の活動を、今。

「はい。舞台は完成しています」

「じゃあ、行こうか」

聖さんの宣言に、皆が頷いた。校長先生もにこにこ笑っている。今からやることは聖さんが提案したことだけど、皆が望んだことでもあった。校長先生も『依頼しようと思っていた』と言っていた。僕がそれを聞いたのは一ヶ月前だ。

それから一度も音を合わせることなく、今日を迎えた。文化祭で歌った歌に数曲加えただけなので、ぶっつけ本番でもなんとかなるだろう。

卒業式の最中ではなく、直後でもない。ある程度時間が経ったときに行うサプライズ企画。

文化祭をもう一度。

「一時間も歌うのって久しぶりです」

「あんまり長いと疲れるよね。まあ、コンサートとかじゃないんだし、気楽にいこう」

聖さんの手にマイクを乗せた。差し出された手は握手を求めているのはわかっていただけ、今はまだその時じゃない。

全てが終わったとき。本当の万屋解散のときに。

「さあ、万屋からの最後の贈り物だよ」

ドアからではなく、窓から外に出た。これも校長先生から許可を得ていた。

窓は運動場に面していて、演台まで走って1分もかからない。

聖さんが演台に立ち、メロディーに乗せて第一声を発した。

「この空が世界を繋ぐなら、僕は空を見上げて歩こう」

「たとえ滲んだ視界でも、その先に君がいるなら」

聖さんに続いて演台の下で歌った。運動場に響く歌声。

それが重なった。

『信じられる』

その後のことは予想通りだった。大半の生徒は帰っていたが、残っていた生徒の連絡により、30分後には運動場を埋め尽くすほどの人が集まっていた。

在校生や卒業生ではない、近隣住民や在校生の友人らしき人までいた。本当にコンサートみたいだった。

万屋の企画は一時間ピッタリに終了し、聖さんたちは走って逃げた。退路は初めから確保していた。また校長室へ窓から侵入し、廊下へ走り去る姿を見送った。聖さんたちを追いかけるにも、校長室へは入れないため、遠回りすることになる。それでも追いかける人は多かった。

まるでアイドルのようだ。まあ、それも分かる気がするけど。

「ありがとう」

後ろからかけられた声に振り返った。

「会長……」

「うん。元、だけどね。今日はありがとう。須賀くんのおかげだね」
元生徒会長、緑川さんは綺麗に笑った。

文化祭の件で知り合った緑川さんは、最後まで生徒会長だった。いつでも代表だった。

そして、聖さんとは違うカリスマ性を持っていた。聖さんとお似合いかと思えば、意外とそうでない。

「聖さんたちのおかげだと思っんですけど」

「須賀くんがいなかったら、あの3人は3人で満足していたはず。ただの身内の集まりで自己満足つてところ。で、須賀くんが入ったから、身内だけじゃなくて、世界が広がった。万屋の魅力は増したのよ」

「それは……有難うございます」

否定しようかと思っただけど、素直にお礼を言った。

これで最後。緑川さんは卒業する。聖さんたちも卒業する。

僕がいて何かが変わったというのなら。それが良い方向に変わったというのなら。

僕は万屋部員だと、自分自身で認められた。

「うん、良い笑顔ね。じゃあ須賀くん、お世話になりました。また今度」

さようならではなく、また今度。どこかで会えるという可能性を残して。

「こちらこそ、お世話になりました。卒業、おめでとございます」

25・5 卒業式（後書き）

「26 さよならの言葉が残った」の数分前です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9082c/>

さよならの言葉

2010年10月8日15時54分発行